右斜め、一席後ろ

森　彩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
右斜め、一席後ろ

【Ｎコード】
Ｎ０１９７Ｐ

【作者名】
森　彩子

【あらすじ】
地味系男子の本田馨は、進学先の高校で同じクラスの藤崎美織に恋をした。
恋した彼女は高嶺の花。
見ているだけで十分だとそう思っていた馨だったが、高校に入ってから仲良くなった前の席の灰田誠の「俺は中学の時から恋のキューピットとして活躍していたんだ」というわけのわからない自信満々な一言と、ずうずうしまでの強引さに、否応なしに青春の甘さと苦さというものを体験せざるえない状況へと陥っていく。

「自信ってなんだよ・・・そんなん持ってねーよ！　持ってたらもっとモテてるわ！」
「あなたって・・・優しいね」
「俺とおまえは友達だろ」

後ろ向きな少年の、初恋友情物語。
＞ＢＲ＜

右斜め、一席後ろ。

彼女の背はいつもまっすぐで、つま先から頭の先までピンと糸が張られているのかと錯覚してしまうほどに――きれいだった。
その清麗といっても過言ではない彼女は、他のクラスメイト達が眠いからといってだらしなく机に顔を伏せたり、化粧直しのために老婆のように背を丸めて鏡を必死で覗き込んでいる女子生徒たちの中で凛とそこに佇んでいた。
僕は小学校の時の修学旅行の時にいった、隣県の有名な寺院でバスガイドに受けた説明を思い出す。泥の中から数千年ぶりに生まれ出たという一輪の蓮の花を。
柔らかく、なまぬるい、ねっとりとしたいやらしい感触の泥から顔を伸ばしたそれは、そんな汚い場所から産まれでたと思えないほど、美しく清らかで遥か昔にどこぞの国で男と通じずに子を孕んだという聖女の頬笑みが頭にふっと浮かんだ。
聖母とは人間の男には触れられないもので、蓮の花はお釈迦様の周りに咲く花だ。
つまり彼女は俺の手の届かない人。
でも、別にそれでいい。
見つめるだけでいいのだ。
学生時代に好きな人がいて、その人の席が近かった。それだけで十分なのだ。
彼女の名は藤崎美織。
俺の名前は本田馨。
名字の始まりが『ふ』と『ほ』である僕らの距離は、入学式からまだ一度も席替えのしていない今の時点はこうで、今は希望的観測から未来があるように言っているがたぶんこの距離が縮まることはずっとない。

……右斜め、一席後ろ。
俺と君の距離はこれ。
ずっと変わることのない、この数メートル。

（あっ……）
昨日、発売されたばかりのゲームを徹夜でやっていたために、俺は半分寝たままで前から回ってきたプリントを受け取る。
前の男子はいつものことだが、今日も後ろも振り返らずに後ろ手でぞんざいにプリントを投げてきた。
空中に放られたことでひらひらとまったそれを、俺は両手をぱしんと合わせることによってキャッチする。
いつもの、何気ない動作だった。

ぱしん。

教室に小さく響いた、俺の掌。
普段だったら、自分も誰も気がついたとしても無意識に意識から排除するであろうその音に、右斜め一席前に座る彼女の肩がぴくりと

ゆれる。
肩先で切りそろえられた黒髪がゆらりとゆれたかと思うと、その陰からほっそりとした白い顎先が現れる。
授業中に黒板ではなく、彼女をみることがこの学校にはいってからの一カ月の間ですでに習慣となっていた俺は眼をそらすこともせずに、むしろ食い入るようなまなざしで彼女の動きを見守った。
スローモーションのように、彼女の高くはないがすっと通った鼻梁、マスカラもつけていないのに黒くて長い少し伏し目がちな瞳を縁取るまつ毛が揺れる。
瞳を一つ、またたくその瞬間、彼女の深いまつ毛が日の光で光るのを確かに俺は見た。
すっと切れ長の猫目が俺に焦点を合わせたときに、瞳の中の一番黒い部分がきゅっと狭まるのを俺は確かに見たのだ。
刹那のその瞬間は教壇に立った教師の一声で終わりをつげる。
瞳はすでにそらされた。
いつも後ろ姿しか見せない彼女は、確かに先ほど俺をみた。
「俺を」というのは俺にとって都合のいい間違いで、実際の所はたまたま耳に障った音の正体をつかもうとしただけだろう。
しかし、しかし、彼女がこちらをみたのは確かな事実であり、それが妄想だけが趣味な童貞男子の哀れな妄想ではなかったことが、また微かに揺れている彼女の肩口で揺れる髪が知らしめる。
ふつふつと胸のおく、いやもっと下から湧き上がってくる何かに俺は思わず身を捩ると、あふれ出そうになるそれを抑えるために、眼の前でだるそうに背伸びをするこの学校に入って初めて話した灰田誠の椅子を後ろから軽く蹴りあげた。
灰田は伸びをしたついでに「なんだ」と言いたげな眼で、上体をそらしてこちらに眼をむける。
ちらっと眼をむけるだけならよかったものを……、男としても大柄な体をもつ灰田のそれは教室の中で一際めだった。
あきらかに話を聞く気がない灰田の姿が、教壇の前にたつ教師歴云

十年の男子教師の眼に入らないわけがなく、「こんらっ！灰田！」という叱咤の声が飛んでくる。
当然のことながら、それまで手渡されたプリントや机の中の携帯などに向けられていたクラス中の注意がこちらに向けられる。
灰田は「すみませーん」と間延びした声で謝ると、教室中でひそやかな笑い声がおこる。
くすくすと、でも嫌な感じではないそれは、灰田のでかい図体とその上にちょこんと乗った小さくて整った顔立ちのせいだろう。
教室がざわめく中で、怒られた灰田にかるく手を挙げることで許しを請いながら、俺はそっと右斜め前に眼を向ける。
———彼女は、本田美織は先ほどと姿勢をいっさいかえることなく、この教室のざわめきから一枚膜を隔てたような静けさをまといながら、静かに前を見つめていた。

妄想男子

「なー」
「んー」
かっこつけて軽音部に入るかー、なんて明らかに下心みえみえなことを、胸を小突きあいながら言っていたのはつい一か月前。
そんなことをいいながらアハアハ笑いあっているうちに、部活動を決める期間であった一カ月は過ぎ去った。

俺たちは今どこにも所属していない。

いわゆる帰宅部というやつだ。
「帰宅部だってなめんなよ。きっと全県、全国を合わせると我が帰宅部こそが、一番の大勢力。サッカーや野球なんて眼じゃねーぜ。あははは」
なんて笑っても、むなしさだけが木枯らしのように吹くだけだということは二週間と二日前に二人とも気付いた。
まだ太陽が昇っている中、グラウンドで駆け回るサッカー部のやつらと、それを夢見るような瞳で見守るマネージャーを俺は陰鬱な横目でみつめる。
「なー、マネージャーってどうして三割増しでかわいくみえんだろうなー」
「う～ん・・・。それはきっと、俺たちがマネージャーという存在を神格化しているからだと思う」
灰田がうんうんと真面目腐った顔つきで頷きながら言う。
「神格化って・・・・・・・・言いすぎじゃない？」
テニスコートを走る女子を「あージャージじゃなくてスカートで走らないかな～」とか思いながら、お互い特にこの後の予定もないのでだらだらと歩いていく。

「いーや。考えてみろ。むさくるし～男たちが、あさくさ～くなりながら、互いの臭気に耐えながらまるで修行僧のようにただひたすら炎天下のグランドを、非情なコーチの「まだまだぁ！」という声を遠くに感じながら走っていたとする。
すでに体力は限界で、喉もカラカラで、足も生まれたての小鹿より頼りないくらいだ。
そんな中で、ようやく止めの合図の笛が鳴る。
その時、その場に崩れるようにして倒れ込んだのがお前だとしよう。
汗か涙かどちらかわからないもので揺れる視界に・・・・・そうだな、あの、右から二番目。あの子が現れて、そっとお前の口元にペットボトルを沿いあてたとする……」
感情のこもった語りっぷりに、灰田の文が脳内でどんどんと映像化されていく。

俺は、この初夏の中あの糞暑いグランドを走っていて。
すでに限界を超えてしまっている俺に対して、中学の時野球部をしていたから基礎体力は十分にある灰田は多少の苦しさは滲ませているが、俺からしてみれは悠々とした様子で俺に軽く声をかけつつも抜けていく。
すでに自分が走っているのかも、わからないほど朦朧とした俺に、涼しい顔をしたコーチの罵声が届く。「本田ー若さをみせろ！若さを！！先生がお前ぐらいのときはなー」
非常に遠くから聞こえる教師の、若かった時の自慢話を右から左に受け流しながら走り続ける。喉からはひゅーひゅーと空気がもれ、呼吸の合間、合間に「死ぬ、死ぬぅ、殺せ、ころして・・・くれい」と、臨終間際の老人のうわ言さながらに呟く俺は、はたから見たら幽鬼そのものだろう。
幽鬼とかした俺は、重い足を必死で、右、左と呪文のように唱えながら、なんとか前へ前へと押し出す。へっぴり腰になりながらも歩みを止めない俺を、わきを駆け抜けていく他の部員たちが少し小馬

鹿にした様子で「ファイト―」などと言いながら過ぎていく。
だんだんとおねえ歩きになってきた俺を、サッカーボールについた泥を吹いているマネージャたちがクスクスと笑っている。
・・・何がおかしいんだ。
俺は今必死で頑張っているというのに、それこそ命がけだ。時々ニュースになる部活動中の熱中症での死亡事故いっぽ手前になっても脱落することなく、必死で両足を前へ、前へと動かしているというのに！　前に進もうと努力しているものを、たとえ格好悪いからといって、笑うものがどこにいるのだバカ者め！
必死で、必死で頑張っている姿をみて笑うなんて、どこが女神だ……スタイルは確かにいいがよく見ると魚に似てんだよ、この魚三姉妹どもめが。
……負の力をもって、なんとか終了の笛の合図まで走り終えた俺は、笛の音に一気に両足から力が抜ける。
もう走らなくていいという安堵感と、走り切ったという達成感。
死ぬまで行進を続けたというどこかの聖者みたいな、安らかなきもちで眼を閉じかけた俺の視界に揺れる黒髪。
それは、後ろや、両脇で二つに括っている魚三姉妹ではなく―――。
黒い髪が肩先でゆれる。心配げに、眉をひそめながらこちらを見下ろす。
ああ、そんな顔もできたんだな……。
気持ちと脳内だけはどこかの有名アニメーション映画の主人公のつもりで、俺は息絶え絶えの中美織を見上げる。
脳内でいかに補完しようと、主人公さながらに俺が彼女に「そなたは美しい」なんていえるわけがない。
なぜなら俺は、主人公にもなれない一般バンピーで、しかもどちらかというと顔も性格もモブキャラなのだ。主人公の友達ポジションを与えられるほどテンションもコミュニュケーション能力も高くはない。
けど、そんな俺でもボキャブラリーの少ない語録を引っ張り出して

しまうほど、彼女の俺を見つめる瞳は美しかった。
きれいだ…。
微かにもれた言葉に、美織は先ほどまでこわばらせていた表情をふっと緩めると、そっとペットボトルを差し出してきて、俺の唇にそっと寄せる。
なんて優しいのだろうと思いながら、飲みやすいように頭を持ち上げようとするが力が入らない。口の中にはいっても脇からもれて、首元をびしゃびしゃにする俺をみて、美織はそっと俺の首の下に手を入れる。
柔らかくて温かい掌が、うなじを支えると、そっと持ち上げられる。重いだろうに、美織はそんな顔一つみせずに、再度俺の口元にペットボトルを合わせる。
ピッタリと合わさったそれは、ゆっくりと傾けられ、俺の喉に静かに流し込まれていく。
甘露水のごとくそれに、俺はそっと眼を細める。

長い妄想を終えた俺は、隣でずっと俺をうかがっていた灰田に、すごくいい笑顔で笑いかけた。
「確かに、女神だ――――」
「だろ」
長い妄想終えて、いい笑顔をする俺に灰田は苦笑しながら、手で頭をがしがしとかく。
「なー、灰田。お前どうして、部活に入らないんだ？」
「んー――…、ちょっと疲れたかのかな～。ずっとやってきたから」
灰田はグランドでひたすらいったりきたりを繰り返す一年の野球部をぼんやりとした瞳で見つめる。
「小学校の時からやってたんだっけ？野球」
「両親が好きだったからな。そりゃーもう物心ついたころから野球尽くし」
軽く肩を窄めながら冗談めかしていうと、灰田は集合の笛のなった

野球部から眼をそらしてこっちをみる。
「ちっちゃいころからそうだったから、野球をするのが当たり前だと思ってた」
ひとり言のようにもらした灰田に、俺は「ふ～ん」とそっけない生半可な返事を返す。
「思春期にありがちな親への反発みたいな～？」
「あはは。ま～そうかな。俺たちいま青春まっただなかなわけだし、そういっておきましょうか」
青春なんて青臭い、なんて思いながら笑う俺らはきっとまだ子供で。そういう風に、自分の中のもやもやしたものを大人ぶって、小馬鹿にして笑うのだ。
それが青春なんだよ。なんて大人な自分と子供な自分で自問自答しながら、だんだんと日がかげってきた道を俺たちは今日も歩く。
平坦で退屈な日常と、実りのない馬鹿げた会話、妄想。
それにほんのちょっと、ひと匙甘い恋心。
何がおかしいのかわからずに、笑いあいながら、影が伸びていくのをじっとみつめる。
学校で一番の美人が俺を好きだ、毎朝起しにきてくれる幼馴染の女の子がいる、なんてどっかの漫画の主人公みたいなことはないが、俺はこの毎日が好きだ。
馬鹿げた会話で盛り上がれる友人がいて、ほのかに恋心をいだく同級生もいる。
俺が、ふふふと気持ち悪い笑いをもらすと、それにつられるように灰田が「なんだよ」と笑う。
「よし、今日はファミレスで飯でもくってくかー」
「あー、あそこ昨日から新作のパルフェでたんだよな。キウイパルフェ！」
「パルフェってなんだよ。お前キモいな」
「でゅふふ」
「なんだよその笑い」

「でゅふふふふ」
「だから、なんなんだよ」
俺のあまりのうざさに、灰田が裏太ももに軽い蹴りをいれる。
いってーな、なんだよ～なんて言いながら、そろそろ蛙が泣き出したあぜ道をゆく。
モブキャラの俺にしたら、上等。上等。

イケメン男子

入店したファミレスは夕方という時間帯もあるのか混んでいた。カランカランという入店の音と共に、騒がしい店内に足を踏み入れる。
大型チェーン店で、メニューの値段が比較的に安いそこはお金のない若者たちで席が全て埋まっていた。
「うわー、やっぱ混んでるな」
俺がキョロキョロと店内を見回している間に、灰田はさっさと髪に名前を記入している。
「そりゃあ、そうだろ。だって他にいくとこないし。冷暖房完備だし、ドリンクバーはついているし。何時間でも粘れる」
店員の冷たい視線をシャットアウトできるだけの、図太さがあればな。
灰田の言葉に、心の中で補足をつけながら、待合の椅子に眼をむける。
想像は出来たが、そこには破廉恥なほどにスカートを短くした女子の集団に占拠されていた。
「はしたない」だとか思いながらも、結局は健康的にさらけ出されたむっちりとした太ももに目がいってしまうのは———、これはもう男という生き物なのだから仕方がない。
出されていれば見てしまうのだ。
そういう風に出来ているのだ。
藤崎だったらこんなことしねーとか思いながら、他の女子のふともをみつめる。
はたから見たら矛盾しているかのように思えるこれが、当たり前のように共存して成り立っているのが男子高校生というものなのだ。
「・・・ムッシュムラムラ」
ほら後ろにももう一人、悲しい男の性に翻弄されている哀れない子

羊が一匹。

「いやーさっきの子たち、短かったな～」
「いや～、眼福。眼福」
俺はドリンクバーとカルボナーラを。灰田はドリンクバーとハンバーグセット（＋サラダ＋コーンポタージュ）をそれぞれに頼んだ。
俺たちは慣れた様子で席から立ち上がると、ドリンクバーにいく。
するとそこには先ほどかるく話題に上った彼女たちの内の二人が立っていた。
二人は後ろに俺たちが並んだことを気にすることなく、オレンジジュースにするかアップルジュースにするかを話している。
「私今ダイエット中だから、炭酸系は飲まないようにしてんだ～」
・・・本当にダイエット中だというのなら、黙って水でも飲んでろ。
なんて、口が裂けてもいえない。
「えっ、敦子痩せてんじゃん。痩せなくたっていいし、まじで。てか私のほうがやばいし」
確かにお前はやばい。
思わず頷きそうになった首を慌てて固定しながら、ふと脇をみるとコップを掴んでいる灰田の親指がぐっと立っていた。
灰田と取れた無言のコンタクトに、軽く感動を覚えている間にも二人の会話は続く。
「そんなことないし、腹とかまじやばいし」
「えー」
「マジだって、敦子なんて比じゃないよ」
キャッキャと会話を続ける二人。楽しく会話をするのはいいことだが、問題は場所だ。
「よし、決めた野菜ジュース！」
アップルとオレンジはどうなったんだよおおおおお！

前の二人にいちいち突っ込みを入れることにも疲れてきたころに、ようやく敦子が決めた。
敦子のコップがジュースの注ぎ口に押し込まれる。
（ああ、これでやっと乾いた喉をうるおすことができる――――。）
「ああー、野菜ジュースでてこな～い」
「ええっ。最悪じゃん」
最悪なのはこっちだよ…。
歯ぎしりをしそうなほど俺が口を噛みしめていると、隣の灰田がさっと背を向けたのが目に入る。
（いい加減呆れて、一回席に戻ったのか）
なら俺も一回もどろうっと、そう思ってため息交じりに灰田と同じく背を向けた俺の目に、店員に話しかける灰田の姿が入る。
「あの、野菜ジュース売り切れみたいなんで補充してもらいたいんですけど」
「大変申し訳ございません。すぐに補充させていただきますね」
にっこりとほほ笑んだ店員が踵を返して調理場へとはいって行くのを、ぼーっと見送っていると後ろの女子高生の声が耳に入る。
「ちょっと、あの人優しくない？」
「うん。すっごく。しかも顔もかっこいいし」
「ねー。敦子の為に頼んでくれたんじゃん。脈ありじゃない？これ？」
「えーだって、私彼氏いるし～」
甲高い二人の声音に、俺はそっと後ろに目を向ける。
俺が見ていることに気がついた二人は、明らかな嫌悪感をにじませた表情で俺を見つめる。
「何見てんだよ」
表情がそれを如実に語っている・・・。
そうだ。
モブで芋な俺に対するギャルの態度はこれが正しい。
おかしいのは、あいつの方なんだ・・・。

そういって必死で自分を慰めながらも、灰田に対する複雑な感情に息をつく。
かっこいいって、罪だな。

「灰田は――どうしてああいうことをさらっとできちゃうわけ？」
目の前に広がるのは空の皿たち。ドリンクバーでの長い長い延長戦に入った俺たちは、互いにちびちびとストローを吸う。
「ああいうこと？」
「ドリンクバー」
「・・・・・・・ああ、あれか」
あれかって…、俺には大したことだったのに、灰田にとってはあれ呼ばわり。
少し卑屈ぎみな自分にため息を隠しきれずに、俺はこくんと頷く。
「そう。あれ」
「また会話が長くなりそうだったし、俺も早く飲み物飲みたかったし」
ここでお前が飲みたそうだったから、って言わないのが灰田。
さらりと恥ずかしいことをやって、なんともない顔をする。
灰田には、それが簡単で。
俺には、それがとても難しい。
難しい顔をして黙りこんだ俺を、灰田がどう思っているかしらない。
ぼんやりとした顔で、氷だけになったガラスコップの中身をストローでカラカラとかきまわしている。
「とってくる」
「うん」
気まずい（俺が勝手にだしてるんだけど）雰囲気を察したのか、それとも本当にただ飲みたかっただけなのかわからない。
灰田が、俺にはわからない。

さっきまで一番近いと思っていた距離が、ぐんと伸びていく。
灰田との会話は面白い。灰田のちょっと小難しい物言いも、全部。
灰田と出会ってから、嫌な思いを一つもしたことがない。
でもそれはいいかえると、本気でぶつかってない、お互いがどこか一歩引いた場所から薄い膜越しに言葉を投げかけているだけで。それだけであって……。
俺は氷のこけた水をズッと吸い上げ、ストローを噛みしめた。

「あっ、藤崎だ」
「えっ？」
ドリンクバーから今度は透明な炭酸を持ってきた灰田が、座る直前に俺の後ろに視線を向けながらいった。
俺は情けない声をあげたと同時に、ばっと後ろに身体を向ける。
藤崎こんな騒がしい場所にきているのか、あんま好きそうじゃないのに。今頃の時間はてっきり学校か県の図書館で借りた本を自分の部屋でみているところだと思っていたのに。
俺の中の藤崎設定は、すさまじい勢いで増えていく。
話したことがないのだから、想像ばかり膨らむのは仕方のないことだろう。。
純粋に喜びながら、振り向いた俺の目に映ったのは、藤崎と似たような髪型のまったく別の高校の女子生徒。隣の席の男がいきなり見つめてkたのだから、当然不審な目でこっちをみている。
「すみません。人間違いでした…」
か細い声で謝罪すると、視線に耐えられずにぱっと前をむく。
するとそこには机に肘をつきながら、かじったままのストローをだらしなく上下にゆらす灰田の姿があった。
灰田はにやにやと人の悪そうな笑みを浮かべている。
「な、んだよ。間違いじゃないか・・・」

嫌な予感が灰田からひしひしと漂ってくる。
最初に断わっておくが、俺は、藤崎のことを灰田に一回も相談したことがない。
「いーや、間違いじゃない」
灰田はストローを加えながらも器用に喋り続ける。
その様は、犯人を追いつめる検事そのもので・・・。
「やっぱ、好きだな」
断定だった。
ぴたりと止まった俺に、灰田は鬼の首をとったように微笑む。
「いやー青春。青春。いいね～。羨ましいよ」
さっき学校の脇を歩いていた時に、俺が言ったのを真似するかのように灰田はいった。
「そんじゃあー、友達の恋を成就させるために、灰田さんがんばりますよ～」
灰田はそういうと、あははーと笑いコップに残ったジュースを一気飲みする。
俺はさっきからずっと固まったままで、灰田の言葉を反復する。
友達のこいをじょうじゅ・・・？
成就って、成就だよな……っ！！
「灰田！ちょっと待て。違う！」
「いいって、いいって、照れなくても。こうみえても俺、中学校の時は恋のキューピットで有名だったんだぜ」
根拠のない自信なんて砕け散ってしまえ！俺はそう心で罵りながら、頭を抱える。
ルンルンとへたくそな歌を歌う灰田は、明らかに面白がっている。
確かに、俺は藤崎が好きだ。
でもそれは、付き合いたいとか、そういうのじゃなくて・・・。
いや出来れば、付き合えるなら付き合ってみたいけど、でも本当にそういうのじゃなくて。後ろから見てるだけで十分っていうか、脳内藤崎だけで十分っていうか。

あうあうと取り留めのないことを考えて、いっぱいになっている俺をみて、灰田はどんと胸を叩いた。
「まっ、まかせとけって」
だから違うって～～～～。
いつもぼーっとしている灰田が、なんだかんだいって強引なのはここ数カ月で気がついていたので、俺はただうろたえることしかできずにがっくりとうなだれた。
好きだと確信をもっている灰田に、いまさらなにをいっても無駄だ。全ては灰田が、俺が藤崎のことを好きだということに気がついた時点で決まっていたのだ。
「あのさ・・・。俺、お前と違うんだよ…。それ、わかる？」
「何が違うってんだよ。わっかんねー。男だったらどんとぶつかって、どんと砕け散れや」
だからそれができないんだよ。
血の涙を流しそうになりながら、俺はぎゅっとグラスを握り締める。
（まあ、こうはいってるがどうせなにも出来ないだろう。だってあの藤崎だぜ。クラスに全然なじめてない一匹オオカミの、あの藤崎だぜ）
好きな女に対する評価にしてはいささかひどすぎるが、俺はうんうんと頷き自分に言い聞かす。
どうせなにもできやしないと。

強引男子

「藤崎、消しゴム貸して」
次の日、だった。
学校についてすぐに、灰田は筆箱の中をみて何かに気付いた様子であたりを見渡す。
落ち着かないその様子に「どうしたんだ」と尋ねても、俺の筆箱を覗いただけですぐまた前を向く。なんなんだよ・・・と思いながら、灰田の後ろ姿を見つめていると、灰田がすっと自分の左の席に顔を向けた。
左の席は・・・藤崎美織。その人だ。
まて、何をいう。何をいうつもりなんだ。お前は。
灰田の視線は明らかに、文庫本に目を落とす藤崎をロックオンしている。
俺が灰田の背中を叩くより、灰田が口を開いたのが早かった。
灰田の声に、藤崎は数秒たってからやっと反応した。
すっと伏せていた顔をあげると、ゆったりとした動作で灰田に顔を向ける。
「・・・友達は持ってないの？　本田君とか・・・」
すっと藤崎の目が俺に向けられる。
藤崎のベビーピンクの唇から、熱い吐息とともに漏れた俺の名前は、これまで聞き覚えのないほど柔らかく耳に響いた。
藤崎が俺の名を呼んだ。というか知っていた！
クラスメイトだから当たり前だろうと、つっこむもう一人の自分を蹴りつけて俺は喜びにうちふるえる。
名前を覚えてくれていただけで、呼んでくれただけでもう十分だよ…。
くいくいと灰田の背中を引っ張る、もう十分だよと。
しかし灰田は俺の合図を無視して言葉を続ける。

「こいつが予備の消しゴムなんてもってるわけないだろう」
藤崎はじっと灰田を見つめたまま、机の中に手をいれる。
入れた手の先に持っていたのは透明の筆箱で、その中にはちっちゃい消しゴムが二個行儀よく並んでいた。
藤崎はそれを取り出すと、灰田の机の左上にちょこんと乗せた。
「ありがとな。次の休みに購買いって買ってくるから」
灰田のお礼に、藤崎はこくりと頷くと「返すの授業が全部終わってからでいいから」と言いながら、再び本に視線を落とす。
ほんのわずかな間だったが、灰田はあっさりと藤崎と会話をしてみせたのだった。

「お前・・・本当にすごいな」
藤崎の言葉を何度も、何度も頭の中で擦り切れるほどに再生する。
「知らなかっただろ」
「知ってたけど、知らなかった・・・」
俺を知っててくれた・・・。
もういいや・・。
目を閉じながら幸福感に酔いしれていると、灰田の手が俺の肩をがしりと掴んだ。
「おい。まだなんにも始まっていないというのに、お前なに達成しました的な顔してんだ？」
灰田のもっともなその言葉に、浸っていた時間を邪魔されて俺は不機嫌もあらわに顔をあげる。
たしかに、灰田のいうことはもっともだ。
今はただ名前を、名字を呼んでもらっただけで、それ以上でもそれ以下でもない。
俺の喜びの基準が低いのは重々承知だ。
中学校になって異性を意識したとたん、女子と話すのが億劫になっ

た。
恥ずかしさが大きいが、もう一つの原因は女の子の恐ろしい一面をみてしまったことだろう。
ニコニコ笑いあって「私たち親友よね」といっていた二人が裏では・・・。という有りがちなそれだが。
当時中学生という多感な時期であった自分にとって、それは衝撃的だった。
「確かにそうだよ！　でも、もういいよ。なんか、そういうの・・・」」
女子、苦手だし。
口では色々言えちゃうけどね。
あははと乾いた笑いをもらしながら、片手をあげると灰田は俺を勇気づけるように肩を掴んだ。
「大丈夫。俺、きゅーぴっと」
灰田の片言のきゅーぴっとの一言と、満面の笑顔に・・・こいつが完全に楽しんでいるのがわかった。
確かに、俺が逆の立場だったとしたら、灰田みたいな行動力はないだろうか見えないところで色々いうだろう。自分のことじゃないから。
あとそういうのは見てて楽しいし。
灰田の根拠のない大丈夫だの一言と、肩を大きな掌で揺らされることで無理やり頷かされながら俺はおもった。
やられた当人には、笑えない、と。
かくして、俺のれんあいじょーじゅ作戦は始まったのだ。

想う男子

異常なテンションをみせた灰田の「恋愛じょーじゅ作戦結構じゃあああ」という雄たけびを思い出して、その作戦の当事者である俺は憂鬱なため息を漏らすことしかできない。

「はぁ～・・・・」

口をらければ漏れるため息に、絨毯の上に座った妹が舌打ちをしたのが聞こえた。

中学二年生という多感な時期を過ごしている彼女にとって・・・兄などごみくず同然なのだ。

だからごみくずである俺は、じっと部屋の隅にたまっているほこりみたいにひっそりと息をひそめていなければならないのだ。

また漏れたため息に、テレビ画面をみていた妹がこちらに視線を投げてよこしてくる。

「・・・うざい」

今日初めて妹と交わした会話がこれだ。

いいや、交わしてもいない。向けられた言葉、か。

冷たい瞳を見つめながら、なんといったらいいのかわからず黙りこむ。

「ため息、うるさい。テレビ聞こえない」

テレビの音量は大きい、少なくとも先ほど母親が「澪、もうちょっと静かにできないの？」と台所から注意するほど。

最近人気の、イケメンユニットのライブＤＶＤを見ている澪は、母のその言葉に一つだけ音量を下げた。

・・・それだけじゃ、なんも変わらないんじゃないの？

そう思ったが、これを口にだしたらめんどくさいことになるなと俺は諦めて、手元の雑誌にも飽きて澪の見ているＤＶＤを見つめる。

普通の男子だったら、汗臭い、きもいと一喝するのに、彼らみたいなイケメンが流す汗はどうしてあんなに煌めいているのだろう。
「汗を流す男がかっこいい」とうっとりと喋るが、かっこいいのは一部の男子であって、その他多くの男子たちは――――。

「お兄ちゃんと一緒に洗濯しないで！！」
「汗臭い。近寄らないで」
「わたしより先にお風呂はいらないでっていったじゃない」

だろう。
そうだ。
この画面の中の彼らが異常なのだ。
画面を真剣な瞳で見つめる澪を見ながら、俺は思う。
お前がみてるこいつらの汗だって、俺と同じく臭いんだぞと。
だが、こんなことを言ったらどうなるかは目に見えているので、俺は口を閉ざし再び、キャーという女子の歓声に頭が痛んで目を閉じる。
ぼうっとしたまま、目元に手を乗せる。
（藤崎は・・・こういうの好きなのかな）
すぐに脳裏に浮かんだのは彼女のことで、俺は再びため息をつく。
ありがちなラブソングじゃないんだから、寝ても覚めてもよぎるのは君のことなんて・・・。
しかもそういうラブソングは、もっと二人の関係が親密だと相場が決まっているのだ。

友達以上、恋人未満。
もしくは元恋人。

俺と彼女の関係は・・・席が近いだけのクラスメイト。
こんなのありがちだろ。

ありがちなラブソングにそんな歌詞がないだけで。
みんながみんが、そんなんだと思うなよ。
思考がぐるぐるとめまぐるしく変わる中で、俺の脳裏を再びよぎる。
彼女の黒髪に触れたいなんて、そんなことを思う自分は変態なのだろうか。
テレビから流れてきた、別れた恋人を思う切ないラブソングに、俺は飽き飽きしてため息をつく。
みんなが、みんな、そういう青春送ってるとおもうなよ。
作詞家、シンガー。

顔も見たこともない作詞家に、怒りをぶつけながら想う。

藤崎は、今何をしてるのだろうか

と。

悩む男子

初夏の日差しで若葉が青々とした陰りを地面にうつす。
葉蔭から時折こぼれる強烈な日差しに目をひそめながら、俺は今日も通学路をいく。
初夏を飛び越えて、夏が先にきたような季節に、気象異常も末期だな。とほざきながら、のろのろと学校前の一番キツイ坂を上る。
周りの生徒の姿は早朝ゆえにまばらだ。
なぜ部活動にも入っていない自分が、こんな早朝から学校にくるはめになっているかというと・・・それは昨日の深夜三時近くにあった灰田からの電話のせいだ。
深夜三時にけたたましい音をたてた携帯に、自分が設定したとはいえ爆音といえるドラムと
女のように金切り声をあげるボーカルの声に殺意を覚えながら携帯に手をのばす。
はやく、はやくこの音を止めなけらば妹か母か父に怒られる。
目を軽くあけるとまだ深い夜がそこには鎮座していて、自分が普段おきてる時間ではないことがわかったので、俺は携帯の通話ボタンをピッときった。

よし、寝るぞ。

そう思ってると、再び鳴り出す携帯。
こんな夜中に電話をかけてくるなんて、どこのどいつだ非常識な。
マナーモードにしても光輝き、震えながら自己主張するそれに、等々根負けして電話にでることにした。
さっさと出て要件をすませれば、まだ早く寝れたのだろうが、寝起きの頭にはそれが難しかった。
「・・・なに」

明らかに不機嫌丸出しな俺の声に、灰田のやけにのんびりした声が続く。
「あ・・・出た」
なんだよ。なんなんだよ。その出たって。お前がかけたんだろ。
俺はがっくりと肩を落としながら、怒る気も失せて早く通話を終わらせようと話を促す。
「あんさ、俺、明日日直じゃん」
「もう、今日だな」
「うん。今日日直じゃん」
「で」
「でね、俺今日夜更かししちゃったからー明日おきれるか不安なんよー
日直って朝早いじゃん。だから馨君、代わりにやってくんない？
明後日俺やっからさ」
「・・・えっ」
「君は早く寝てたみたいだし大丈夫だよね！　じゃあ、明日は頼んだ」
こちらに反論させる間も与えずに、強引に電話を切られる。
俺は再びかけなおして、たぶん不毛になるであろうこの問答を繰り返すほどの気力がなくて再び枕に顔を埋めた。

　このようなことがあって、俺は現在この道を歩いている。
日直、といえば同じ出席番号の男女が一日ことに交代で行うもので・・・俺の一つ前である灰田は
隣の藤崎と同じ・・・だ。
心の準備が・・・。
学校に近付くにつれてなんともいえない焦燥感に襲われ、悩ましげに息をついた。

早く学校についてほしいような、ついて欲しくないような。
つまり自分は、今のこの時から逃げ出したいのだ。

ちゃんと、しゃべれるかな。俺。

もし、あまりの挙動不審っぷりに「きもい」って言われたら生きていけない。
・・・気がする。

ドキドキ男子

ドアの前でひとつ溜息をついてから俺はドアに手をかける。
いるかな、いないかな、早いかな、遅かったかな
緊張しながらドアを開けると、そこには藤崎の姿がすでにあった。
すでに職員室からもってきた日誌に目を通しているその姿に、俺はドアを開けたまま立ち尽くす。
ドアを開けたまま、一向に教室へと入ってこないクラスメイトに不審を覚えたのか、うつむきがちだった藤崎が顔をあげる。
ちらりと視線があったが、すぐにそれはそらされる。
おはよう・・も、なしですか。
俺は、ずーんと落ち込みながら二人しかいない教室へと足を踏み入れる。
そうして、藤崎の斜め後ろに腰をおろす。
「・・・・」
「・・・・」
無言だ。無言で座りこんで、何もせずにじっとしている俺は彼女の瞳にどれほど不審人物として映っているか。
俺は奇妙に音をたてて唾を飲み込むと、裏返った声をあげた。
「あっ・・のさ」
二人しか、いない。
二人しかこの教室にはいないのだ。
藤崎の方が揺れる。
「・・・・・・・・・・・おはよう」
正面を向いたままの藤崎が、ゆっくりとこちらに目を向ける。
眼鏡の奥の瞳は、思いのほかまんまるだった。
「・・・おは・・よう」
かるく見開かれた瞳に、彼女の驚きが伝わって俺も緊張してしまう。
「あのさ・・・」

あいさつだけで終わりかと思っていたらしく、前を向こうとした彼女を引き留める。
「今日、灰田が日直じゃん」
「うん」
「昨日の夜、灰田から電話があって日直変わってくれって言われたんだ」
「・・あぁ。だから今日あの人がこないで、本田君がきたのね」
会話を、会話をしている。
藤崎と、俺が、会話を！
自分の動悸の激しさに、自分の声も藤崎の声を聞こえないほどだ。
はあはあ、と鼻息も荒く動揺を隠しきれない俺に、前にいる藤崎がいった。
「・・・そこに座ってたら、一緒に日直仕事できないよね？」
藤崎のもっともな言い方に、俺は「そうだね」と早口で返すと、恥ずかしさのあまり机や椅子に軽く足をぶつけながら立ち上がる。
がたんがたんをやかましい音を立てる、俺に藤崎はきょとんとしている。
むけられる視線に居た堪れなくなり、あわあわとしながらも藤崎の机の前の椅子を借りる。
膝に手を置いたまま後ろを振り返ると、そこには当たり前だが藤崎の姿が。近い！
藤崎をみずに、俺は必至でノートを見下ろした。
そこにはきちんと縦横がそろった見やすい字が並んでいる。
「もう、ほとんどできてるね」
日誌は朝のうちにかけるところを書くのは常識だろう。
藤崎は今日の欠席者以外の部分は、ほとんど埋め尽くしていた。
覗き込んでいると、ふわっと柔らかい香りが鼻をくすぐる。
シャンプー？いやこれはリンス？俺だってシャンプーを使っているというのに、男と女というだけでどうしてこうも違うのだろうか。
変態くさいな、自分と思いながらも目の前で静かにシャーペンを滑

らす藤崎を見てるという、幸福感に酔いしてる。
ぼうっとしてると、藤崎がいきなり顔をあげた。
「ほとんど出来てたし、本田君別に来なくてもよかったね」

・・・えっ。

俺が藤崎を見返すと、藤崎は真顔だった。
出しすぎたシャーペンを、そっと指先で押し戻すと藤崎は筆箱の中にシャーペンをしまった。
とまったままの俺を無視したまま、藤崎は文庫本に手を伸ばす。
「・・・きてくれてくれてありがとう」
文庫に挟まれたしおりをぬきとりながら、藤崎はぼそりとつぶやいた。
その言葉に固まったままの俺の時間がようやく動き出す。
「誰もこないと思ってた。いくら友達だからって、朝一からってのは大変だったでしょう。それにこんなの、ぶっちゃけちゃうと一人でもできることだし」
本から目をそらさぬまま、藤崎は薄い唇をたてに開いた。
「それをわざわざ来てくれて・・・本田君っていい人なのね」

よろこび男子

「今朝の首尾はどうだったー？」
ぼんやりと空を見ながら歩いてると、隣を歩く灰田が間延びした声でたずねてくる。
「首尾って・・」
灰田のにんまりとした顔をみて、俺は眉間にしわをよせる。
からかわれるのはどうも苦手だ。
「特に・・」
「朝から、ぼんやしてるぞ。なんかいいことあったか？メアド聞けたのか？」
矢継ぎ早に続く質問に、俺はぐっと喉をつまらす。
そんな、メアドを聞くなんて、そんな・・・。
黙りこむ俺に、灰田は「えっ・・もっといいこと？！」とすっとんきょんな声をあげる。
灰田の教えてコールに根負けした俺が口を開くと、灰田はうんうんと頷いて、最期に大きなため息をついた。
「優しいひと、ね」
「な、なんだよ」
「は～。朝からなんかいい顔してんなと思ったら、優しいね、か」
「だから、なんなんだよ。その感じ・・」
やれやれと肩をすくめる灰田に、俺はぎゅっと手に力をいれる。
聞かれたから、しょうがなく答えたのに、その反応はなんなんだ。
澪が愛読する少女漫画では、初めてであった男女がいきなりキス（俺様男からの強引なキス）して、された女は「やだ」とかいいつつ、なんだかんだいって嫌じゃない・・むしろ好き。なんて現実でやったら確実に後ろに手が回るだろうということがまかりとおっている、が。
現実は、さっきも言ったが、そんなことしたら運が良くて張り手、

悪くてお縄ってところだろう。
だいたい女ってやつは、そんなんにぽっと憧れをもちつつ、それがじっさい自分の身に降りかかると「きゃー痴漢」だのなんだの・・・ぶつぶつぶつぶつ、灰田に対する怒りから違う方向にそれた自分の思考に、俺は頭を大きく横にふる。
「まー、よかったな。悪くは思われてないじゃん」
不満そうな溜息をついたが、灰田はそれ以上はなにもいわずにとりあえず俺を持ち上げる。
「日直変わってよかっただろう。藤崎と一対一で話すの、初めてだっただろう？」
「まー確かに、ああいう機会がなければ・・・話しかけられなかっただろうね・・」
自分の消極的人格は重々承知なので、俺は空笑いしながら灰田の言葉に同意する。
「よかったな。俺が泥をかぶっただけあるぜ！　その結果お前イイ人、俺悪い人！」
最期がインチキ外人みたいに片言になった灰田に、俺はぶっと吹き出すと、つられて灰田も吹き出す。
あはは、あははーと笑いながら歩いてると、灰田がにこにこと笑顔で言った。
「ってことで明日も日直よろしく」
「あはは・・・・・はあ！！？」

翌日、日直の件を藤崎から聞いた担任に灰田はこってり絞られた。
担任に呼び出された灰田のでかい丸まった背なかを見送っていると、

前に座っている藤崎の肩が揺れる。ほんのわずか後ろに向けられた小さな白い顔は、俺にむけて小さな口元だけの笑みを見せてくれた。
藤崎とのきっかけを与えてくれた灰田にありがとう。
調子にのった灰田に罰を与えてくれた藤崎にありがとう。
俺は、二人に感謝の念を込めて、そっと藤崎に頬笑みかえした。

「お前がちくったんだってな」
昼休みを職員室での正座でつぶした、灰田は5時間目の終了の鐘が鳴ると同時に隣の藤崎に声をかけた。
教科書とノートを机の中にいれた藤崎は、くすりともせずに冷たく囁いた。
「わたし、自分の仕事をちゃんとしない人は嫌いなの」
「・・・・」
「・・・・」
これには、俺も灰田も黙りこんだ。
本当は違うけれど、はたからみたら確かにそれが事実なのだ。
俺は心で灰田に謝りながら、前を見つめる。
「本田くんが代わりにきてくれたわ」
「・・・・」
「あなたが頼んだんだってね」
「・・・・おう」
「1日だけならまだ許せたけど、二日連続はさすがに・・・ね」
はっと、冷たく笑いながら藤崎は横にかけてある鞄に手をかける。
二人の間に強力なブリザードの吹き荒れる中、担任が教室へと入ってくる。
話は中断したかとおわれたが、担任の話の合間に灰田がぼそりと「かわいくねえ」と、拗ねたようにつぶやいたのが聞こえた・・・・のは俺の空耳なのだろうか、というか空耳であってほしい。

「かわいくなくて結構です」
・・・・・・空耳じゃなかった。
藤崎の絶対零度の、小さい声が耳に入った俺は、がくりと頭をうなだれた。

語らう男女

担任に怒られ日直を一人ですることを命令された灰田は、授業で使う配布物を両手に抱えてだるそうに朝の日差しの中を歩く。
開け放たれた窓からさんさんと降り注ぐ光を「痛い痛い」と痛がる灰田の隣を、同じ授業で使用する黒板に張りつける大きな地図を両手で抱えながら俺は歩く。
「かわいくない！」
隣を死人のように歩いていた灰田は、突然立ち止まるとそう吐き捨てた。
「お前はあいつのどこがいいんだよ」
「・・・」
切れ長の瞳、華奢なからだ。触れたら壊れそうな肩、腰。
顎筋で潔いほどに切りそろえられた髪。灰田の言葉に次々とでてきた言葉に、これをいったらこいつにからかわれるんだろうな～と思って、俺は黙り込んだまま外に目を向ける。
「かわいげがないね。胸もないし」
「お前、今全女性を敵にまわしたぞ」
「でもあれはなさすぎだぞ。お前きっついのがタイプなんだな」
きっついって・・・。灰田の言葉に、俺は脳裏で、ああいう不器用な感じがいいけどな～と思う。
確かに、灰田の言うとおり。
藤崎は、言葉が・・足りない。かもしれない。
朝に日直の仕事を手伝いにいった時も、こなくてもよかったね発言には全身がとまった。
整った顔つきも冷たい印象を与えて、真顔でこちらを見られると怒っているように感じられ・・ないでもない。
でも俺は、そういう不器用な感じがいい・・・と思う。
藤崎が見せてくれた小さい、口元だけの笑み（ニヤリともいえる）

に俺は、だらしなく頬が緩むのを抑えられずに口元をもごもごさせる。
「じゃっ、じゃあ灰田はどんなのがタイプなんだよ」
口元のにやけをごまかすために、俺は逆に灰田に質問を返す。
はぐらかせるかと思っていたが、灰田は素直にその質問を受け入れてううんと唸った。
「俺はな・・・。女らしい女がいい。優しくて、柔らかくて、暖かくて、こう俺がいなくちゃ、
守ってあげなくちゃ！　みたいに思えるやつ」
灰田はそういいながら、きゅっと目を細める。
遠い何かを、誰かをおもいだしながら話しているように。
「灰田ってさ・・・好きな子いるの？」
俺が思わず尋ねてしまうと、灰田はなにもごまかさずににかっと歯を出して「ずっと片思い」笑った。
はっきりと笑顔で答えた灰田に、逆にこっちが恥ずかしくなってしまって俺は戸惑いがちに「そうなんだ」と、一言だけもらして黙りこんだ。
黙りこんでしまった俺に、灰田は笑いながら「そうなんだって、もっとなんかきかねーのかよ」肘で小突いてきた。
「じゃあ、その子俺知ってる・・・？」
「知らない人」
灰田はそういうと、ようやく気恥ずかしそうに肩を揺らす。
前に目をむけたまま「これでおしまいな」と、自分からいってきたのに一方的に話をおしまいにしてしまった。

若干の気恥ずかしさを覚えながら黙り込んだまま歩いていると、あっというまに教室へとついた。
朝ゆえに、まだ教室からは誰も声もしない。

両手がふさがっているがゆえに、前の灰田が足をつかってドアをあける。
もたつきながらも、ドアを開けた灰田は「あっ」と小さく声をあげた。その声に、俺も後ろからそっと教室内を覗き込む。
「「「・・・」」」
何も言わず、三人で見つめ合ってしまう。
灰田と藤崎の間にある嫌な沈黙を裂くよう俺は「おはようい天気だね！」とすっとんきょんな挨拶を藤崎に投げかけた。
「・・・おはよう」
藤崎は小さく挨拶をし返すと、また黙り込む。
「「「・・・」」」
気まずい、気まずすぎる。
とりあえず灰田、お前教室にはいれ。
後ろから足を蹴ると、ようやく灰田は足を動き出した。ゆっくりと教壇の上に配布物を置く。灰田に続いて、俺も黒板の下に地図を立てかける。
「今日も手伝ってるの？」
俺と灰田以外の、高い女の声が教室内に響く。
その声にには、明らかに灰田に対する非難が混じっていた。
「俺たち友達だもん」
灰田が、ぽつりとつぶやくと。藤崎は「ともだち、ね」と鼻で笑った。
どうしようもないくらいに最悪な空気に、俺は唾を飲み込む。
「今日は俺が手伝うって言ったんだよ。灰田一人だし、大変だろうなって思って」
張り付いた笑顔で、藤崎をみると。
藤崎は文庫本を出しながら、そうとそっけなく言葉を返してくる。
「・・・余計なことをしたかしら」
それは、先生にちくったことですか？
言葉の足りない藤崎に、俺は背中を嫌な汗が流れるのを感じた。

「おっ、よく気付いたな」
・・・・灰田あああああああ。
初めて灰田を殴り飛ばしてやりたい気持ちで、俺は灰田の足を思いっきり踏みつける。
本に注がれていた藤崎の瞳がこっちを向く。
藤崎は静かに俺たちを見つめると、再び視線を下に向ける。
ぞっとするほど冷たい視線に、俺はびくびくしながら灰田を見つめる。
お前キューピットじゃないのかよ。今最高最悪に空気が悪いぞ！！
俺の視線に気がついた灰田は、弱った様子で頭をかいた。
このままここで立っていても仕方ないので、ふたりして席へと向かう。
残念なことに、俺たちの席は藤崎の隣と斜め後ろだ。
いつもだったらわくわく気分で着席しているが、今日は違う。
なんだ、この空気は。。
俺は後ろから灰田の椅子をけり上げる。
どちらかか出ていけばいいのだろうか、だかここには出て行った方が負けのようなそんな意地のようなものを感じる。
こんな最悪な状況で、本を読み続ける藤崎さすがだぜ！！
わけのわからないところに感動しだしたのに、自分のキャパがオーバーしてしまったことを感じて、俺は思わず笑いたくなってしまう。
俺が壊れかけのことを、尻の下からくるリズミカルな振動によって察した灰田は意を決した様子で、藤崎の方を向く。
まて！お前何をする気だという俺の心の叫びを無視して、灰田は口を開いた。
「・・・・・・・なに読んでんの？」
灰田の言葉に、俺は深い虚脱感に襲われて思わず机の上に伏せてしまう。
灰田のいきなりすぎる言葉を、藤崎が本に目を向けたまま「答える義理はないわ」と一刀両断したのは言うまでもない。

藤崎のとりつく暇もない言葉に、灰田はぐっと口を引き結んだ。
「・・・親睦を深めようとするクラスメイトにそれはないんじゃないの・・・」
「親睦、ね」
「・・・・・・・・・・本田あ！なんかいえ！！」
「えっちょ突然なにを！」
耐えきれなくなった灰田の突然のパスに、俺はあわあわと声を震えさせる。
そんな俺に、藤崎はきっと灰田を睨みつけた。
「乱暴な言い方ね」
「乱暴って、えっ」
「本田君に日直を頼んだ時もそうやったわけ」
「えっ、ちょっ」
藤崎の冷たい言葉に、俺はあわてて二人の前にたつ。
「違う！違うんだ！　自主的に手伝ったんだ」
「そうだそうだー」
藤崎の迫力におされていた灰田が、後ろから声をあげる。
これ以上刺激するな！と思い、灰田の口に手を回す。
俺たちの親しげな様子に、藤崎は目をみはると手にしていた文庫本をもって立ち上がる。
「あなたたち、本当に仲がいい見たいね。どうやら私のしたことは本当に余計なお世話だったみたいだわね」
そのまま、この場を去ろうとした藤崎に、俺は思わず手を伸ばしてしまう。
「違う！・・・違うくないけど、違う！」
突然の展開に言葉が思いつかないが、とりあえずここで藤崎をとめないと、とんでもなく彼女を傷つけてしまう気がして俺は藤崎の手を止める。
もともと、灰田と俺が日直を変わったのは俺が原因だ。
だからといって、そのことを原因の張本人である藤崎にいうなんて・

・・でも、ここで何かいわないと確実に何かを壊してしまう。
俺はぎゅっと息を飲み込むと、口を開く。
「俺たちは確かに友達で、たぶん藤崎がおもってるようなそういう関係じゃないよ。
でも、ああやって藤崎がいってくれたのはすごく嬉しかったし、そうやってはっきりと言えるところが・・・・いいと思う！　だから全然迷惑じゃないよ！」
藤崎のか細い手首をぎゅっと握りながら、つたない言葉を紡ぐと、目の前で藤崎の瞳が瞬く。
後ろでだまって俺たちをみていた灰田が、後ろからぼそっと呟く。
「俺、本田のことといじめてないよー」
いじめられっ子と思われていたことに、俺は恥ずかしさを覚えて顔をぼっと赤くさせる。
藤崎にそうみられてたなんて、情けなさすぎる。
「・・・放して」
藤崎の口からしばらくして漏れた言葉に、俺はあわてて藤崎の手首から手を外す。
とっさのこととはいえ、大胆なことをしてしまった。
「どうやら、私の思い違いだったみたいね」
藤崎は文庫本を机の上におくと、ひとつ息をついてから口をひらく。
「でも、だからといって自分の仕事を友達に押しつけるのはよくないと思うわ」
最初に戻った。
けど、藤崎の言葉にはまえと違って仕方ないというような柔らかさを含んでいた。
それに対する灰田の「お前、頭かってーんだな」という言葉も、以前と違う柔らかさがあって、おれはほっと息をもらす。
「私、お前じゃないわ」
「じゃあ、なんて呼べばいいんだよ」
「・・・・藤崎って、呼べばいいじゃない」

藤崎はそういうと、再び自分の席に着席した。そっけない言葉だが、俺は再び藤崎がここに座ってくれたことが嬉しくて見えない背中に微笑みかけてしまう。
「なあ、藤崎。お前ずっとなによんでんの」
灰田の最初の問いに、藤崎は横目を灰田にむけながら・・・
「言ってもわからないと思うわ」
にやりとほほ笑んだ。

シビアな男女

あの一件以来、俺たちは話すようになった。
最初はあまりの険悪した雰囲気にどうなることかと思ったが、、、
「藤崎、おはよう」
「おはよう」
こうなったいまではあれも、いい思い出だ。
「今日もいい天気だね」
そういいながら鞄を自分の机の横に引っかける、そうしてから窓の外を見ると蝉の合掌が学校の隣の山から聞こえてくる。
校内にはいるまでは騒音でしかなかったこの音も、学校に入ると一種の夏のＢＧＭになってしまい、そう頭に響かなくなる。
「・・五月蠅いわ」
藤崎にはこのＢＧＭがお気に召さなかったらしく、額に手を当ててため息をもらす。
「まー、短い命、だしね」
「蝉って一週間か二週間で死ぬのよね？」
「あーらしいね」
「夏の間、少なくとも一カ月、長くて二カ月もずっと音が絶えないってことはどれだけ、あれが生まれているんでしょうね」
苦々しいといった様子でもらす藤崎に、俺は苦笑をもらす。
「藤崎は、蝉、きらいなの？」
かたん、と音をたてて灰田の椅子を引くと、俺はそこに腰を下ろす。
教室に二人っきりだし、会話をしているのだし、別にこれぐらいは普通だろう。
俺が隣に腰かけると、藤崎がちらっとこちらに眼を向ける。
「好きとか、嫌いとか、考えたことないわ。けど・・・今はきらい」
窓の外の樹に隠れているのか、蝉の声が一層大きくなる。
「子孫を残すために必死なのはわかるわ、でも朝っぱらはやめてほ

しいわね。特にあんまり寝てない日の朝はきつい」
「寝てないの？・・また本よんでた？　」
俺の言葉に、藤崎は机の中から本を取り出す。
「好きな作家の新刊が出たのよ。読み終わるまで眠れないわ」
「…本当に、読書熱心だね」
「だって私、これぐらいしかすることないもの」
あっけらかんとした様子でいった藤崎に、俺は何も返せずにははは
と乾いた笑いを漏らす。
決まりが悪いといった様子で頬を掻く俺に、藤崎はにやりと口元を
ゆがめる。
「そういうときって、普通フォローするものなんじゃないの？」
「ご、ごめん」
「ふふっ。まあ、私も人のこと言えないし、ね」
「ははは」
こうして藤崎と話すようになった気がついたことは、彼女が意図し
て人を近付けないようにしていることだ。
彼女のぶっきらぼうな態度は、元からなのかもしれないが、一応自
分がそういったのが原因で他人から遠ざけられているということは、
こうやって俺に時折指摘するのを見るとわかっているみたいだ。
ならそれを直せばいいんじゃない、と頭の隅で思いながらも、彼女
がこれでいいと思っているみたいだし、それでいいならこれ以上自
分が何かをいう必要は…ないんだろうな。
俺はうんと一つ頷くと、藤崎の伏せがちの瞳を軽く見てから、そっ
と息をついた。

「おっす。はよ」
「おっす」
「・・・」
灰田がいかにも今起きました、といった様子で教室に入ってきた。

俺は灰田の席を立ちあがると、入れ替わるように灰田が自分の席に腰を下ろした。
ドガっという音がして、椅子や机がガタガタと大きな音がしたため、本に夢中になっていた藤崎がじろりと灰田に視線を向ける。
灰田はその視線に気が付いているのか、ふわあと大きい欠伸をしながらぐっと背をそらす。
そうしてそのまま俺の方に後ろ手で手を振る。
邪魔だよ。とその手を横にどけると、灰田はゆっくりとこちらに顔を向けてくる。
「今日って、俺あたるっけ？」
「……たぶん」
俺の言葉に灰田は絶望の声をあげると、そのまま俺の机の項垂れる。
「昨日、寝てないの？」
「うん。ゲームやってた」
「そうか…」
「う～ん」
ぐりぐりと頭を揺らす灰田の後頭部をぼーっと見ていたら、藤崎が声をあげた。
「うるさい」
「・・・ここはお前の部屋じゃありませ～ん」
灰田の馬鹿にしたような物言いに、藤崎が勢いよく本を閉じる。
・・そうなのだ。この二人は、絶望的なほどに仲がよくない。
「そんなことやってる暇あったら、さっさと自分のところやれば？」
藤崎のもっともな言葉に、俺もうんうんと頷くと、灰田が「あああ」と声をあげ唸った。
「わからない。わからないんだ・・」
「馬鹿ね」
「馬鹿だ」
「・・・寝てるからだよ」

容赦のない言葉の応酬に、俺が小さく声をあげた。
「ほんだぁ～～～。今日、昼飯と夕飯おごるから～」
でかい図体の灰田が甘えた声をあげる。
・・・・気持ち悪い。
「前も同じこと言ってたじゃない」
「俺は本田にいってるんだ～」
本田くぅ～ん。と猫なで声をあげる灰田に、俺は深いため息をつくと「デザートもつけろよな」と了承の言葉をもらした。
「ええっと、ここからだから～・・・」
俺が英語の教科書を開き説明をしだすと、それまで背をむけたままだった藤崎が振り返った。
「どうしたの？」
突然振りかえった藤崎は俺の教科書を覗き込むと「ここじゃないわよ」と冷たくいった。
「「うっそ」」
俺と灰田が同時にいうと、藤崎はこくりと頭を縦にふった。
「残念だけど事実ね」
「藤崎・・・」
「藤崎ちゃん」
「・・・・・・・・はあ」
俺と灰田から同時に名前を呼ばれ、見つめられた藤崎はズレ落ちかけた眼鏡を上に持ち上げながら、「灰田だけ二千円だせ」と言い放った。

シビアな男女（後書き）

ようやく、なかよく・・・・なりはじめたかな。

交流男女

「後ろまでプリントいきわたったな～」
担任の聞いてるようで聞いていない言葉に、俺は机の上のプリントに眼を落とす。
夏真っ盛りのムンムンと熱気のこもった教室で、だれているクラスメイトたちの背がいつもより
真っ直ぐになっているのは、たぶん気のせいではない。
「来週からはじまる臨海学校だが～チームわけは俺が平等に、席の順で決めさせてもらった。」
教室内のあちらこちらからあがった声を、担任は無視して続ける。
「チームわけは・・・紙をみろ。集合時間は朝の七時に学校の校門前。遅れたら置いていくし、成績もあげないから気をつけろ」
アバウトな説明を続ける担任の話を右から左に流しながら、俺はプリントのチームわけを見つめる。
席順ということが幸いしてか、俺と灰田と藤崎はおんなじチームだった。
それにプラスして、俺の隣の藤田さんと俺の後ろの席の本庄と村上さんの三人がチームに加わって、わが班は合計で男子三人、女子三人の六人・・・だ。
「それじゃあ、五分でチームの名前を決めろ～」
名前って、一班、二班でいいじゃないか。そういいたげな何人かのクラスメイト達を無視して、クラス中が一気に騒がしくなる。
おれたちの班も、とりあえずは前の方に集まった。
後ろをむく灰田と藤崎。座ったままの俺と藤田。後ろからわざわざご足労を願った本庄と村上。
「で、チーム名だけどどうする？」
灰田が問うと、班内に戸惑った空気が流れる。
なんでもいいよと言わなかっただけまだマシかもしれないが。

う～んと悩んでいると、俺の隣の藤田が「はい」と勢いよく手をあげた。
「はい。藤田」
灰田が指すと、藤田はきゃっとほほ笑んで甲高い声をあげた。
「私、うさぎ飼ってるから～うさぴょんグループってどうかな？」
うさぎを飼ってるから、
うささんグループ。
なんともいえない藤田のネーミングセンスに、班内がちょっと騒然となる。
誰も口を開かないのにざわめいたように感じたのはなぜだろう。
「う～ん・・・」
藤田の後ろの村上が、笑いをこらえるような奇妙な唸り声をあげた。
村上の様子に藤田がもうっと頬をふくらませた。
「な～に、文句ある？　文句ありたげな顔をしてますね！みんな！」
「いや、、文句っていうか、、高校生でうさぴょんって・・・」
頭がいたいといった様子で続けた村上に、男たちも乾いた笑いをもらす。
ずっと無言な藤崎に視線をむけると・・・恐ろしいくらいに無表情だった。
藤田の発言に、灰田が「うさぴょんは・・・さっすがにな～」と顎を撫でた。
「じゃあ、灰田君も何かいってよ」
がたんと軽く机にのりだす形で、灰田に近寄った藤田に、灰田は少し唸ってから「うささんは・・・？」と、、、どうにもならない案をひねり出した。
あれ、でもうさぴょんよりマシな気がするのは―――俺だけじゃないだろう。
後ろにたつ本庄と村上をみると、彼らも同意見だったらしく。
別にそれでいいよ。といいたげな顔をしている。
「うささん・・・か。うん。うさぎが残ってるし、それもいいね！

」
藤田が噛み砕くようにうささん、うささんと何度も繰り返して、ようやく舌に馴染んだのか満足けに頷く。
村上や本庄も「うささんでいいよ」といったので、俺も「かわいいしね」ととりあえず笑った。
俺のかわいいしね、発言に藤田が「でしょう」といってこちらにっこりとほほ笑みかけてきた。
「う、うん」
女子に真正面から笑いかけられたことに、若干気恥ずかしさを覚えながらも頷き返すと、藤田の視線が藤崎に向けられる。
「藤崎さんは、それでいい？」
藤田の甘い声に、藤崎の冷たい声が突き刺さる。
「うさぴょんよりはましね」
瞬間、それまでにこやかだった藤田の表情が固まったのは俺の見間違いではないだろう。
変な空気に胃が痛んだ俺とは逆に、灰田は平然と藤崎の発言に「確かに」と頷いた。
「・・・もうっ、灰田くんも藤崎ちゃんもひどい～」
冷たく凍った氷が解けるかのように、一気に明るくなった空気に後ろの村上と本庄も、朗らかに笑い声をあげる。
「だって、お前。うさぴょんって・・・お前が思ってるよりきついぞ」
「も～かわいいじゃん。ねっ、本田君！」
突然隣から腕を叩かれて、俺は反射的に頷いた。
「ほら！仲間一人み～っけ」
きゃははというのが相応しい笑い声をあげる藤田に、俺もつられて微笑んだ。

「誠くん。重いからもって～」
「俺だって重いんです～。黙ってもて。おんなじ歳だろ」
「ぶ～。いじわる～いいもん。薫君に持ってもらうから」
かおるくぅ～んとこちらに、手を振る藤田の頭を村上が宥めるように頭を叩くのが見えた。
「灰田のいう通り、みんなもってる荷物は一緒なんだから、自分で持ちなさよ」
「え～」
きゃっきゃと戯れる女子たち。
甘えたような声をあげて我が班のムードメーカになったのは藤田愛美。
藤田は…その朗らかな性格と、天然さゆえか男子からの人気が高い。
藤田の隣だということと、臨海学校のチームが一緒だということで、藤田にホの字の連中からはずいぶんとやっかまれた。
変われるなら変わってあげたいものだが、そうもいかない。
そしてそんな愛美を宥めているのが、村上翔子。
村上はママさん的な存在として、暴走する（主に愛美）を宥める役をかってでてる。
臨海学校の以前から、二人は席も近いということもあり仲がよいらしい。
華奢に藤田とは違って、がっちりとした体格だが…出てるところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んでいる体系が・・・いい。らしい。
「じゃあ、なおきく～ん」
「こら」
本庄直樹は隣を歩く灰田と、軽く話しているらしく、藤田の声を無視している。
「あ～無視した！ひどい」
藤田の嘆きを無視し続ける本庄に、藤田がきいいっと声をあげた。
それさえも無視する本庄は、藤田とおんなじ中学校を出ているらし

く、藤田の扱いを心得ている様子だ。
俺は、後ろからひょこひょこと付いてくる藤崎を、止まって待つ。
藤崎は薄い肩に不釣り合いな重たいバックを、ぜえぜえといった様子で歩いている。
「藤崎、もうちょい体力つけないとダメだな」
おれが前からそう声をかけると、俯きがちだった瞳を向けてくる。
「・・・そうね」
頷きながらも少し悔しげな様子の藤崎に、俺は「もう少しだから頑張れよ」と声をかけると、そっと藤崎が日陰になるように隣を歩いた。

続・交流男女

「は～」
やっとついた。
海の近くの山の上のこれから四日間お世話になる宿泊所に鞄をおくと、俺たちはひとまず腰を下ろした。
「なんで、こんな山の上にたてちゃったんだろうな」
大きく大の時になって転がる灰田が、身体から空気を全部吐き出すんじゃないかというほど深く息をつく。
壁に背を預けて座り込んでいる本庄が「津波とか、そういうのをさける為じゃなのー」と答えると、俺たちは「なるほどー」と納得して同時に頷いた。
「わかっちゃいたけど、エアコンなんてありませんよね」
「扇風機もありませんよ」
灰田の言葉に本庄を重ねてくる。
俺は立ち上がると、窓の前に立った。
・・・風は、ない。
「これから四日間ここね～」
「いや、帰りとかいれると五日間だね」
「「五日間、これか～」」
灰田と俺が嘆くと、本庄が突然「いいものがある」といって、自分のバックに手をのばした。
うだるような暑さに倒れ込んだままの灰田と、窓際から一歩も動きの出ない俺に、本庄がバックからとりだしたものは・・・・うちわだった。
「本庄、お前、それ本気？」
灰田のマジなトーンの声に、俺は変な笑いが漏れるのを止めることができない。
笑う俺と、軽く怒りモードに灰田に、本庄は真顔で頷いた。

「うらにな、最近人気のグラビアアイドルのりさちゃんの写真がプリントされてるんだ。
お前ら、どのリサちゃんがいい？　ちなみに俺は、この浴衣の奴な」
本庄はさっと自分のをとると、俺たちに写真がプリントされたほうをむけながらうちわをさしだしてくる。
「おれ・・・水着」
灰田はさっと肌色の水着をきた（上下がつながってて、胸元からへそにかけて大胆に開いているやつ）うちわをさっととると、それを顔面で見つめながらゆっくりと仰ぎ始めた。
俺はどっちでもいいので、残ったやつを手にとる。そこには黒の大人っぽいビキニを着て子供のように無邪気に微笑むりさちゃんの姿があった。
試しに仰いでみると、おもったより涼しいそれに、俺は思わず「いいな」と口を滑らしてしまった。
「なー」
「んー」
トイレといって本庄が部屋から姿をけすと、すぐに灰田が話しかけてくる。
俺が顔を向けると、灰田はうちわでこっちにこいと俺を呼ぶ。
お前が動けよ、と思わないでもなかったが、元来素直な自分はおとなしく灰田の元へと足をのばす。
「女子たち、大丈夫だと思う？」
心配というか、どちらかというと楽しげな様子で灰田は俺に問いかけた。
俺は灰田のその顔に、眉間に眉をひそめると、疲れたように静かに首を横に振った。
「大丈夫じゃないと・・・おもう」

「うわ～きれい！うみ！」
藤田がきゃっきゃと韻を踏みながら歌うように、窓際ではしゃいでいる。
先ほどあった布団を敷く場所を決める話し合いは、藤田の「私窓際がいい！　翔子ちゃん隣ね！」という言葉で、特に波乱を迎えるでもなく決まってしまった。
藤田の強引な進め方に、村上さんがこちらを窺うように見てたので、私は構わないといった様子で顔を前で手を軽くふった。
「ねーねー、二人とも泳げる？」
海を見ながら一人で騒いでいた藤田が、くるりとこちらに顔をむける。
今はもう男性もいないんだから、その甘えたような喋り方をしなくてもいいとおもうのだけど、私はそんなことを思いながらも、さすがにそれをいってこの四日間をこれ以上最悪のものにしたくはないので、口を閉ざしたままだった。
村上さんは、バックの中から制汗剤を探すのに必死らしく、藤田の問いに生半可に言葉を返している。
藤田はそれが面白くないらしく、再びほっぺたをふくらましている。
これは、こういう子なのだ。
私がそう自分にいい聞かせていると、猫のように藤田がこちらにじりよってきた。
「ねー、藤崎ちゃんは泳げる？」
「・・・海で泳いだことはないけど、プールでは一応」
「えー以外」
なんだ、その以外って。
疑問には答えたぞ。私はそう心でいい、村上さんと同じく自分のバックに手をかける。
日焼け止めを塗りなおさないと。これから海で泳ぐのだ。めんどうなことに全員参加で、他の女子のように女の事情を使ってまでやりたくない、わけでもなかったので、私はそっとバックの中から水着

を取り出す。
近くにいる藤田が私が水着をとりだしたのをみたとたん、急に瞳をキラキラと輝かせはじめた。
「あ～水着！　そう水着よ！　見せ合いっこしようよ」
「は？」
「別にいいよ」
私の戸惑いの声にかぶさるように村上さんの了承が部屋に響く。
藤田は「やった」というと、両手を天に突き上げ、自分のバックの元へとかけていった。
その俊敏な動きに、私はなにも言えずに藤田を見送る。
そんな私に気がついたのか、隣にいた村上さんが「まあ、あとできるわけだし、ちょっと付き合ってよ」とほほ笑んだ。

「じゃじゃ～ん！！」
タオルの下でごそごそと芋虫のように三者三様に動いていると、藤田が大きい声をあげた。
藤田は「うんしょうんしょ」といいながら、タオルを脱ぐと、子供がはじめての御着替えを完了させたみたいに、腰に手をあててこちらにウィンクしてみせた。
「お花柄～。かわいいでしょう」
来ている本人同様に、下の生地がわからぬほどにピンクや赤の花で覆われた騒がしい水着を、藤田は得意げに見せつけてきた。
「お～かわいい。かわいい」
村上さんがぱちぱちと手を叩いたのに、私も一応合わせて手を叩いておく。
「じゃあ、次はしょうこちゃん！」
「はいはい」
村上さんが巻いていたタオルととくと、村上さんは青の生地に白のボーダーのシンプルだが可愛らしい水着だった。ビキニタイプの上にショートパンツをはいた迫力満点のナイスバディっぷりに、私と

藤田は思わず自分の身体を見下ろした。
わかってはいたけど、負けている。
「しょうこちゃん～はっくりょく～！」
ひゅーひゅーと声をげる藤田に、村上さんは照れたように胸元を隠す。
「じゃ、じゃあ次は藤崎さんね」
向けられる二人の視線に居心地の悪さを感じながら、早々にこれを終わらせてしまおうと、巻いてたタオルをはずす。
私の水着は黒字に水玉のビキニにセットでついてきた同じ柄のスカートといった、ありきたりのものだ。
私の水着姿をみた藤田は、しばらくじーっと見つめてから「思ったより、胸ある」と落胆した様子でもらした。

海中交流男女

おっちにーさんしー
メガホン越しに聞こえる体育教師の掛け声に合わせて屈伸を続ける。
前の方にいる一部の連中が、真面目にやってないらしく教師の「ふざけてやってると死ぬぞ」という怒号がこっちまで届いてくる。
普段だったらなんとも思わないが、今はみんな水着姿なわけで・・・やわ肌をさらす女子たちの屈伸は、色々と多感な時期の男子、というか男全てにとって破壊力抜群なわけであって・・・。
班順で並んでいるわけであって、自然と前にいる藤崎に目がいく。
・・・これは、仕方のないことである。
自分で自分を戒めながらも、うろうろとゆれる視線は前で豪快に屈伸を続ける教師と藤崎を間を行ったりきたりする。
軽く膝を曲げるだけの屈伸を続ける多くの女子たちと違い真面目・・・というか、基本的に言われたとおりのことを実行する（言われたとおりにやらないという労力を使いたくない感じ）藤崎は、黙々と深い屈伸を続けている。
藤崎は黒の水玉模様の水着を着ている。
深く屈伸すればするほど、際どい位置まで見える太ももや・・・わずかに見えるお・・・しりに、ドキドキを抑えきれずに、内心アワアワしながら見つめてしまう。
下心もだが、それよりも、藤崎はああいう感じだがぱっとみ美少女なのだ。
触れれば折れそうな肩に、薄い腹。一度も日に当たったことがないのではないかと思うほどに白い肌。
海に入るためか、髪を後ろで一つに束ねているため見える首筋は血管が見えそうで・・・・ごくり。
下心はある。
だがそれだけではない。

首を回しながらさりげなく周りを見渡すと、こちらをみている男子を数人発見した。

十分な程の準備体操を終わらせて、さっそく海へ入ろうという時になった。

集まったうささんグループの面々。

さあ、入ろうかという時に藤田が手をあげた。

「わたし、泳げな～い！！」

「・・・そう、なんだ」

黙りこんだ周りに代わって、俺が相槌をうつ。

俺の相槌に「そうなの」と藤田は返すと、だ～か～ら～っと言葉を続ける。

「泳ぎに自身がある人は挙手～」

周りを見渡すと、誰一人手をあげない。

俺も泳げるには、泳げるが、人に教える自信も・・・あと、藤崎と泳ぎたいという思いに駆られて、さげられたままの右手に力がはいることはない。

藤田は「ふ～ん」とじと～っとした目でメンバーを見渡してから、さっと灰田の腕をとった。

「げっ」

「げってなによ！　あ～私傷ついた！　だから責任とって、誠くんは私の水泳指南役決定ね！」

「ちょっ待てよ」という灰田の言葉を無視して、藤田は灰田の腕を掴んで海へと突っ込んでいく。

そんな二人を見送ってから、残された村上さんが「じゃあ入ろうっか」と号令をかけた。

「藤崎って、泳げるんだね」

「それなりに、ね」

浮き輪につかまっている村上さんと違って、一人で浮いている藤崎

に声をかけると、こくんと頷いた。
「以外だな～」
「…藤田さんにも言われたわ。そんなに私どんくさく見えるかしら？」
「・・・・いいえ。そんなことないです。ただ・・・なんか以外で」
「そう・・・・」
藤崎ははあっとため息をつくと、水中メガネをさっと装着する。
「潜るの？」
「うん。貝探すの」
「・・・・かい？」
「そう貝」
藤崎は俺の繰り返しに、頷くと大きく息をすって水中にもぐり込んでしまった。
俺は隣を浮き輪につかまってぷかぷかと浮いている本庄と村上を見つめると、優雅に浮かぶ二人は揃って両肩をあげた。
「藤崎さんって・・・・わからないわ～」
村上の言葉に本庄が頷きながら「貝って相当潜らないととれないよね」と見当違いなことを述べたので、村上さんが「あんたもわからないわ」と疲れたように垂れてきた前髪をくしゃりとかきあげたのだった。
村上さんと一緒に苦笑しながら、浜辺をみると顔を水につけるところから始めている藤田と灰田の姿が目に入った。

「ぷっは～！　やった十秒！」
「・・・・はあ～」
藤田が水面から顔をあげると、こちらに向かって笑顔を向けてくる。
「はいはい。よかったですね」
「なによ～それ！　もっと褒めてよ」
藤田の言葉に、はいはいと頷きながら俺はため息をもらした。
せっかくの海なのに、かなづちのお伴だなんて。

潜ることもままならない彼女に付き合ってると、今日一日が終わりそうだ。
再び海中にもぐりこんだ藤田の海中で広がるわかめみたいな頭をぼうっと見下ろしていると、そろそろ限界なのかプルプルと苦しげにゆれる髪の毛に気がついた。
そろそろ限界だと海面に頭をあげようとした瞬間に、俺は藤田の頭の上に手を乗せる。
「ふがぽっ」と奇妙な声をあげて、泡が沢山吐き出した藤田に「次は二十秒な」と海面から声をかけると、抗議するかのように藤田の手が俺の手に絡みつく。
「こんくらいで死なない。死なない。はいーラスト五秒〜」
のんきにカウントダウンする俺に対して、藤田が海中から恨み事をいっているみたいだが、何を言ってるのか聞き取れないので無視する。
「3、2、1・・・・・・・・・・・よしっ」
藤田の頭から手をとると、藤田が勢いよく海中から起きあがってきた。
長い髪を前にたらして顔がみえない様は、海からでてきた妖怪のようだった。
海藻みたいな髪をかきわけながら、藤田は恨みがましい目つきでこちらを見つめてくる。
さすがにやりすぎたか、と思って藤田の顔を覗き込む…と、俺はあることに気がついて、笑いを抑えようとしたが、ついには無理で吹きだしてしまう。
「なっ、なによ！」
突然笑い出した俺に、藤田が声を荒げる。
俺は腹を抱えながら、藤田にそっと顔をよせると小さい声で教える。
「はな、出てる」
とたんに藤田は再び海面へと勢いよく沈んでいき、この海にきてから一番の潜りっぷりを見せつけてくれた。

続・海中交流男女

「あっれー諦めたの？」
ぷかぷかと三人で浮かびながら、時折海面に戻ってくる藤崎の戦利品を受け取っていると、こちらに向かってやってくる二人が見えた。浮き輪にすっぽり身体を預けた藤田と、それを引っ張ってくる灰田だ。
「だめだ。こいつ泳ぎの才能ない」
灰田のその言葉に、藤田のチョップが飛んでくる。
「この人さいって～なの！　私のこと無理やり潜らせたのよ！　本当に苦しかったんだから！！」
ゲシゲシと海中でも蹴りあげているらしく、灰田が「いていて」と小さく声をあげている。・・・灰田が拒否しないのはさすがに自分がやりすぎたと思っているらしい。
「別に泳げなくたって、海水浴くらいできるわよ～。ずっと泳いでいるわけでもないんだからね」
悔しげな藤田に、村上がそう声をかけると、灰田を蹴ることをやめた藤田がうんと頷いた。
「あれ、藤崎は？」
藤田の蹴りからようやく解放された灰田は、あいつの傍にいるとたまらんといった様子でこちらへと向かってくる。
「潜ってる。貝とるんだって」
「へー」
俺の言葉に灰田は興味なさそうに頷くと、二人してしばらく黙りこむ。
「なー」
「んー」
「俺がここについてから結構たってね？」

「・・・・うん」
「俺が、ここについてから藤崎のこと見てないんだけど」
俺と灰田が顔を見合わせる。
確かに、少し、時間が、かかっているような・・・気がしないでもない。
というか、先ほどまでのペースと違いすぎる。
藤崎が海中に消えてからどれぐらいたった？
とたんに顔色を変えた俺に、灰田は大きく息を吸い込むとそのままもぐりこんだ。
「お、おい！」
突然潜り始めた灰田に、本庄も気がつく。
「どうした？」
「藤崎が・・・・」
俺の真っ青な顔に本庄も察したのか「本田、先生に伝えて」というと、灰田に続いて海へと潜り込んだのだった。

やばい。
やばい。
これは、やばい。
私はつった足を抱えながら、海中でもがいていた。
痛みと苦しさで潤む視界で何もみえない。
落ち着いているように思える心のうちで、自分が今そうとうやばい状況なのだということがわかった。
どうしよう。
苦しい。
痛い。
手の中に握り締めた貝にぐっと力をいれる。
大きくて新鮮な貝が食べたいからもぐって死ぬなんて、なんてかっこわるいの。

かっこわるい、というか、やっとみつけたこの大きさ、これを食べなくちゃ、わたし、死んでも死にきれない。
論点が違うことを考える自分に、頭がグルグルする。
これは、本格的に危ないみたいだ。
助けて
焦りのあまり海中だということも考えずに、助けを求めて口を開いてしまう。
あたりまえだが残り少ない息がもれ、口の中に大量にもぐりこんできた海水に私は意識が一気に遠くなるのを感じた。
ああ、水死体って…ぶくぶくになるのよね
今わの際だというのに、冷静な自分に笑うとさらに空気がもれて私は意識を失った。

視界の悪い海中で目をこらすと、そこに彼女はいた。
力の抜けた白い姿態が、頼りなく揺れる様にぞっとして慌てて手を伸ばす。
身体はまだ暖かかった。顔を覗き込むと、まだ瞳は涙に揺れていた。
俺はほっと息をつくと、苦しげに開かれたままの藤崎の唇に大きく息を吹き込んだ。

続・海中交流男女（後書き）

本田君、ごめん。

海上男女

「うう・・・ん・・」
畳の部屋にしかれた布団の上で彼女が首をことりと動かした。
乾ききっていない、生乾きの髪が頬や首元にはりついているのが不愉快なのか、眉間に大きな皺がよっている。
俺はそっと、おそるおそるといった様子ではりついたそれをはがす。
「・・つめたい」
指先でつまんだ髪に力をいれると、先から水滴が溢れてくる。重力に逆らえずに滴となっておちた水滴が藤崎の首元に落ちてつうっとうなじをたどり、後ろの桜色のシーツに濃いシミがつくのを俺はじっと息をとめてみつめていた。
目がそらせないでいる自分を心のうちで罵倒すると、その場でぎゅっと体育座りをして顔を膝に埋める。
・・・灰田の迅速な判断の結果、藤崎は無事だった。
灰田と本庄がぐったりとした藤崎をかかえて海からあがって来た時は、生きた心地がしなかった。
砂浜に横にならせると、すぐに海水を吐き出しはじめた藤崎を背を灰田が少し乱暴にさすっているのを、
俺は背後に突っ立ったまま呆然としたまま見つめていた。
そうしてからすぐに、涙に揺れる瞳を虚ろに開いた藤崎の顔にへばりついた髪を、灰田の大きな掌が撫でるようにして後ろに流す。
目をあけて、青空や周りを確認した後にすぐに目を閉じた藤崎に周りは慌てたが、俺が呼んだ先生の「水を飲みすぎただけ」という言葉に、集まっていた人々が安堵の息をもらす。
先生の「部屋に休ませておこう」という言葉で、灰田と本庄が藤崎の身体を抱えていく。その時、灰田が俺に向かって「藤崎の荷物もってきて」と小さく声をかけるまで、俺は呆然と立ち尽くすことし

かできなかった。
そして、今この部屋には俺と藤崎しかいない。
保険の先生か女の先生がくるまでのほんのわずかな時間を、灰田は俺に与えてくれた。
気を失っている藤崎が身体をくねらすたびに、情けないことに俺は敏感にそれを察知し見ていないというのに、脳裏にまざまざとその様を映し出す。
「ううん・・・」
藤崎が一際大きく、長い声をあげたので顔をあげると、そこにはうっすらと瞳を開いた藤崎がいた。
「ふ・・じさき、大丈夫か？」
俺の声に藤崎は小さく唸ると、頭が痛むのか額に手をあてた。身体を起そうとする藤崎に、俺はそっと彼女の肩を掴んでその場に留める。
「もう少し、寝てた方がいい」
「・・・わたし、海にいたわ」
ぼんやりとした様子でこちらを見上げる藤崎に、俺は苦笑するとそっと乱れた掛け布団を直す。
「うん」
「海にいたわ・・・で、足をつって――――溺れたのね」
「無事でよかったよ・・・」
藤崎の青い唇が動くのをみて、俺はほっと息をもらしながら藤崎に「もう少し休んだほうがいい」と告げると、彼女は力なく頷くと無防備に瞳を閉じた。
部屋にこもる熱を動かす、夏のなまぬるい風が部屋に入ってくる。揺れるカーテンをぼうっと俺がみつめていると、寝たと思っていた藤崎が静かに口を開いた。
「本田君・・。助けてくれて、ありがとう…」
とじた瞼を軽くあけた藤崎に、俺はぎこちなく頬笑みかえしながら一つ頷くことしかできなかった。

安心しきった顔で寝むりについた藤崎の頬をみると、先ほどよりも赤みがさしてきたのがわかった。
寝顔を見ていると、部屋の扉が静かに開かれる。
俺が静かに身体を向けると、そこには保険医の姿があった。
保険医は「遅くなってごめん」と口を動かすと、見ていてくれてありがとうといって俺を部屋から暗い廊下に押し出した。
海からあがってから身体を拭く暇もなかったために冷え切った体に、ようやく気付いて俺はぶるっと身体を震わせる。
日陰の廊下にいると寒いのか、それとも暑いのかわからない感覚に陥る。
確実にわかるというのが、ただ不快だというだけだ。
じとりとした汗が背を伝うに、ぞくりとしながら俺は頭をふる。
溺れかけた藤崎を助けることもできずに、好きな女が助かったことに喜ぶことよりもつまらない自分の矜持に傷つく自分に反吐が出そうになりながら、俺は淀んだ空気に溺れそうになりながらあえいだ。

海上男女（後書き）

本田君、助けてくれてありがとう。

〇〇男女ってつけるのがつらくなってきた・・・。

続・海上男女

のろのろと坂道を一人下っていると、下から誰かが上がってくるのが目に入る。
この宿泊場所を使っているのは現在うちの学校だけであって、俺は誰にも会いたくない気持ちを押し隠して、ひどい顔をしているだろう自分の頬を軽く叩いた。
上がってくる人物が、こちらに手を振ってくる。
俺は、ふっと息をつくと、両肩から力を抜いた。
「よう。藤崎どう」
灰田は手にもっていた俺の紺のパーカーを片手で投げ渡してくる。
空中に放りあげられた黒い影を、俺は両手で受け取りながら「大丈夫」と小さく返した。
灰田は「そっか」と軽く頷くと身を翻す。
どうやら、俺にパーカーを渡す為だけにこの長い坂道をあがってきてくれたらしい。
俺は前をゆく灰田の広い背を見つめてから、目をそらすように灰田の隣に並び出た。
「これ、ありがとな」
パーカーの裾をひらひらとさせながらいうと、灰田は一つ頷く。
「一回目を覚ましたよ。自分が溺れた、ってちゃんとわかってた。記憶もはっきりしてるみたいだから、あともうちょい休んだら戻ってこれるみたいだ」
「戻ってきたら――――みんなに迷惑かけた礼をしてもらわないとな」
灰田が意地悪げに、何かをたくらむように俺に頬笑みかけてくる。
俺はそれに「目を覚ましたばっかなんだから、あんま血圧あげんなよ～」
ただでさえ、いっつもお互い喧嘩腰なんだから。

俺が呆れたようにいうと、灰田は「はいはい」と絶対こいつわかってないといった様子で軽く頷いてみせた。
「灰田って、泳ぎ得意なんだな」
俺の言葉に灰田はう～んとうなってから、にぱっと意地の悪い笑みを浮かべる。
「お前よりは、、、得意かもな」
黙りこんだ俺を、隣から灰田が覗き込んでくる。
「あっ、怒った？」
「…別に」
「怒ってるだろ」
「怒ってない」
「怒ってない奴はそんな顔しないぞ」
しつこい灰田の顔を暑苦しいとどけると、灰田はひどく芝居じみた感じで「ひどいっ」と言っている。
ご丁寧なことに、ハンカチを噛むような仕草もつけている。
「暑いから近寄るな、ふざけるな」
俺の言葉に、近くの木に止まっているであろう蝉が一斉に鳴きだす。
俺と灰田はその騒がしい声に、顔を見合わせた。
お互いに苦虫をつぶしたような顔をしていたので、俺たちは歩くスピードを少しあげる。
一刻もこの場から離れたかったのだ。

砂浜につくと、休憩時間なのか生徒たちは海からあがってそれぞれお喋りを楽しんだりしていた。
灰田と俺が上から下りてきたのに気がつくと、何人かの女子たちがこちらに近寄ってくる。
「藤崎さん大丈夫だった？」
「意識は取り戻した？」
飛んでくる質問と、女子たちの声のトーンと瞳の輝きでわかった。

藤崎ではなく、灰田目当てだということが。
あきらかに灰田に向かっている女子たちの瞳に、俺は押される形でざっと足元の砂を踏みしめて後ろに下がる。
灰田はそんな女子たちの視線に気がついているのかいないのか、ぼうっとしたいつもの様子で俺を親指でさす。
「本田がついてたから、詳しくはこいつに聞いて」
「・・・そう」
女子たちの深いため息が聞こえてきた。
実際のところ彼女たちは顔にはりつけた心配そうな、不安げな表情をいっさい変えていないのだが、俺の耳には聞こえたのだ。
たしかな、深いため息が。
灰田のありがた迷惑な言葉に、最初に声をかけてきた女子は俺に声をかけるしかなくなり、俺に同じ質問を繰り返す。
彼女の本当の目的をしっている俺は、その質問に「大丈夫だよ」という簡単な答えを返して早々に終わらせてしまう。
「そっか～よかった～」
にっこりとほほ笑むと、くるっと再び灰田に顔を向ける。
しっかりと安心したかのように微笑んでから、すぐに本来の目的にもどる素早さに俺は苦笑しながら、そっとその場から離れそうとする。
離れようとしている俺に気がついたのか、灰田も「大丈夫だから心配しなくていい」と女子たちに言い聞かすとすぐに俺の隣に走りよってくる。
・・・俺は、後ろを向くのが怖くてだまって前を見て歩き続けた。
「あー！　馨君！誠君！」
藤田が俺たちを見つけたとたんに、大きな声をあげて砂の城？を作る作業をいったん中止して立ち上がった。
「みおりん大丈夫！？」
こちらにかけてきた藤田さんが、開口一番に訪ねてきたが藤崎の容

体なことに俺はほっとしながら頷いてみせた。
「そっか～よかった～」
藤田さんはほうっと息をつくと、こちらにむかってへにゃりと笑みを見せてくる。
「わたし、みおりんが溺れたって知った時全然動けなかったんだ。でも、馨くんも、誠くんも、みんな一斉に動き出して・・・すごかった」
何も動けなかった自分を恥じているのか、藤田さんは俯きがちになって両手を合わせている。
申し訳なさそうな藤田さんに、灰田は藤田さんの後頭部をがっと掴むとそのままぐわんぐわんと大きく揺らし始める。「あわわわ」という声にならない声をあげる藤田さんに、俺は「灰田」と声をあげる。
「お前が動いても、溺れる人間が二人になるだけだから」
動かなくて正解。といって、藤田さんの頭から手を離すと、そのまま本庄や村上さんの方へ歩いていく。
ぐしゃぐしゃになった髪を直す藤田さんに、視線をむけると……
（罪な奴だな）
ぐしゃぐしゃになった髪をさらにまぜっかえすようにして、自分の髪に顔を埋める藤田さんの真っ赤になった耳が目にはいった。

続・海上男女（後書き）

灰田無双ですね。

無敵状態な彼にイライラっとしながらも、後半泣かせたるわ。
早く灰田の余裕ぶっこいてる顔をゆがませたい。
と思う自分はゆがんでいるんでしょうか・・・。

砂上男女

寝苦しかった暑さがふっと消える。
私は汗か何かわからないが、濡れた身体が冷えるのを感じて思わず身を震わせた。
「あっ、藤崎さん。起きたー？」
私の身体が揺れたのに隣に座っていた保険医が気がついて、いじっていた携帯をパタンとしまうと、こちらに笑顔を向けてくる。
「・・・はい」
先ほどよりはだいぶ楽になった身体を起そうとすると、そっと保険医が背を支えてくれる。
「ご迷惑かけて・・・すみません」
海水を飲んだ影響か、まだ鈍く痛む額をおさえながら謝ると、保険医はにこりと微笑む。
「いいのよ。これが私の仕事だし、それに無事でよかったわ～。頭、まだ痛い？」
「すこし・・」
頷くと、保険医はそうといってこちらにミネラルウォーターを差し出してくる。
「寝てる間や海水浴中に汗をかいたと思うから、苦しくても飲んで」
にこっとほほ笑んで差し出された水を、私はのろのろと手をあげて受け取った。
キャップはすでにあけられていたので、私はそっと飲み口に口づける。
乾いた唇がぴりりと痛んだが、なんとか最初の一口を飲み込む。
あの時、私をあんなに苦しめた水だと思えなかった。
「飲んだら元気でたでしょう？」
保険医の言葉に私は頷くと、そのまま一気に喉に水を滑らせる。
「あんまり海に慣れてないのに、調子にのっちゃだめじゃない」

私が無事だとわかったとたんにお説教モードに入った保険医に、私はふうっとため息をもらすがじっと我慢した。
確かに、今回は自分が悪い。
プールには波がなくて、海には波があるのだ。
反省モードにはいって、じっとする私に保険医はふっと息をつくと、こちらに微笑みかけた。
そしていきなり両手をぱんと合わせた。
「そうそう！藤崎さん覚えてる？」
突然キラキラとした瞳と、やけに甲高い声をあげはじめた保険医を見返す。
「はあ・・・覚えてる、とは、なんのことでしょう？」
足りない言葉に首をかしげると、保険医がほうっと息をついた。
「あなたが溺れたのを助けてくれた子たち！　同じ班の子なんですってね！　まわりの女子たちや他の先生たちが、すっごくかっこよかったっていってたわよ！」
きゃっといって、鼻息を荒くする保険医に私は微妙な顔をしてしまう。
「・・・あらっ、女の子だったら誰だって憧れるシチュエーションなのに・・・反応が薄いわね」
私はその言葉にため息をもらしそうになるのを必死にこらえて、無理に微笑んだ。
「・・・そう・・・ですね」
何がそうですねなんだ。と自分で自分を叱咤しながら言葉を続ける。
「私、自分が溺れた時のこと・・・よく覚えていないんで・・・・・ちょっと」
これが私がいえる最高の言葉だった。
保険医は「もったいない」というと、私が起きたことを先生たちに伝えてくると立ち上がった。
「先生」
「はい」

背をむけて部屋から出ていこうとする保険医に私は声をかける。
「先生が来る前に、ここに誰かいましたか？」
「ええ。いたわよ。あなたを助けてくれた子。本田君、、、だっけ？華奢で無口な感じの子ー」
先生の言葉と姿が扉の向こうに消えていく。
「・・ありがとうございます」
届いているのか、いないのかもわからずに私はお礼をもらすと、寝乱れてぐしゃぐしゃになった髪をなおす。
寝顔を見られた。
かっこわるいところを見られた。
助けて・・・くれた。
私は全身から息を吐き出すように、深い息をつくとそのまま布団に顔を埋めた。

「あっー！　みおりんもう大丈夫なの！？」
急病な人が出たとき用の部屋からでて、自分たちの部屋へふらふらと戻るとそこには二人の姿があった。
みおりんって・・・。
複雑な想いにかられたが、かけよってきた藤田の顔は確かに心配げだったので、私は言葉を飲み込む。
大丈夫、大丈夫？といって身体のあちこちに触れてくる藤田に、「大丈夫。・・・心配してくれてありがとう」といって、そっとその手を捕まえる。
「無理しないでね！夕ご飯とかもいける？　私たち上までもってこようか？」
初日の夕ご飯はそれぞれが持ち寄った食材をつかって、各班で作ることに決まっていた。
近くのキャンプ場でそれを作って、また上までくるのはめんどくさいだろうと思って、私は首を横に振る。

「ううん。大丈夫」
私の言葉に、藤田さんは「無理しないでね」といって、そっと肩に触れてくれた。
むずがゆいような気持ちに、私が村上さんの方に目を向けると彼女もこれまた心配そうにこちらを見つめてくる。
「本当に、無理しないでね」
「そう！いざとなったら男どもに、みおりん担がせるし！！」
藤田はそういってカラカラと笑うと、「早く着替えちゃいなよ」といって開かれたままだった扉を閉めた。

「藤崎、もう大丈夫なんだな」
水着からジャージに着替えた後に、下のキャンプ場におりていくとそこんは既に先についてた男子たちの姿があった。
カレーのルーとにらめっこをしている灰田の隣に突っ立っていた本田君が、こちらに気がつくとへにょりとほほ笑んでこちらに近寄ってくる。
「うん」
「頭とか、痛くないか？」
「大丈夫」
「そう」
心配げな表情で質問した後に、にっこりと微笑みかけると後ろにいる男二人に声をかける。
「藤崎、復活だってー」
「「おー」」
ルーとたまねぎをみつめたままだった灰田と本庄が、ちらりと顔をあげ声をあげた。
「おーって・・・」
苦笑する本田君が、灰田と本庄に向けていた視線をこちらにむけるとそのままぴたりと固まってしまった。

「・・・・藤崎が、笑ってる」
・・・・どうやらしらないうちに、頬が緩んでたらしい。
本田君の失礼極まりない言葉に、むっとするよりも、さらに笑いがこみあげてくる。
「そんなに、意外？」
本当に失礼ね。といいながらクスクスと私がほほ笑むと、他の四人も唖然とした様子でこちらを見つめてくる。
私は五人のぽかんとした表情に、更にこぼれてくる笑いに身をよじらせる。
藤田の「うっそー前からみたい」という声に、村上さんの「ちょっとー止めなさいよ」といいながら結局は一緒に前へと回ってくる姿。
まだ唖然とした様子の本田君に、ルーから顔をあげてこちらをきょとんとした顔で見つめる灰田、たまねぎから顔をあげていつもの表情でこちらを見つめる本庄。
何がおかしんだろう、と思いながらも溢れてくる笑いを止めることができずに、私は素直な気持ちで五人に伝えた。
「・・・ありがとう」

砂上男女（後書き）

藤崎がーーーーーーーーーーー！！

もう少し心を開くまで時間をかけようと思ってたんですが・・・

もう二十話近いし、そろそろ彼女にも変化を持たせないと・・・な、

と思って、ここで笑わせちゃいました。

どうしよう笑っちゃった・・・。

かれーな男女

カレーライスにいれるようのためねぎを切る灰田の、いてーよ。
という叫びが耳に入る。
「どうして水中メガネをかけているのにしみるんだ～」
だんだんと実に男らしくまな板の上でたまねぎをきざむ灰田が、苦しみの声をあげる。
たまねぎをきるひと～といった時に、嬉々として手をあげた灰田がにやにや笑いながら「最終兵器～これさえあればたまねぎなんて・・・ふふっ」と自信満々にとりだした水中めがね。
へ～それでふせげるんだ～と関心していたら――――
「あ～いでえ～」
これだ。
鼻をすする灰田に村上さんのするどい声がとぶ。
「汚い！もう、これ！これ鼻につっこみな」
といい、灰田にポケットティッシュを数枚掴んで渡そうとして、灰田の両手がたまねぎの汁で汚れているのをみて眉をひそめると、俺に顔をむけてきた。
「私、触りたくないから。本田君やってよ」
「人を汚物みたいにいうなよ」
「鼻水は誰のでも汚物よ」
はい、といって汚物の処理をまかされた俺は暗い気持ちになりながら本田を見つめる。
水中メガネのしたの瞳が潤みに潤んでいる。
その、ちょっと上目遣い、、、やめてくんない？
捨てられた子猫みたいな瞳でこっちをみてくる灰田の鼻に、俺は若干、ほんの少し程度太めに丸めたティッシュを詰め込んだ。
「いてて・・おまいてて・・はいんない、はいんなお」

「変な声あげんな」
ぎりぎりと音をたてて鼻にティッシュを詰め込むと、隣でこちらをみていた村上がぶほっと吹きだした。

「藤崎・・・」
「なに」
鍋に湯をわかす藤崎の背後からきられたじゃがいもを持った本庄が顔をだす。
「なにしてんの？」
「お湯をわかしてんの」
「・・・お茶、とか飲みたいのか？」
ボゴボゴとにたった鍋の前で仁王立ちしている藤崎が、眼鏡がゆげでくもるのもきにせずに無表情で「なんで？」と返した。
二人の微妙な雰囲気にきがついた俺がそっとそこにわけはいると、本庄がこちらに顔をむけてきた。
「なあ、おれたちカレーをつくるんだよな」
「あっ・・・うん」
本庄の視線をたどると、そこには藤崎のすがたが。
眼鏡をくもらせながらも、微動だにせず沸騰している鍋を覗き込んでいる藤崎の姿はちょっと異様だった。
「そうよ。カレー」
藤崎が鍋をみつめたまま、ひとり言みたいにこちらに声をかけてくる。
「カレーって、先に材料いためるよな」
「・・・ああ」
本庄の噛みしめるように確かめる言い方に、俺はうんと頷いた。
おれたちの言葉に、藤崎がようやくこちらに視線をむけた。
眼鏡が湯気でけむっていて彼女がいま、どんな瞳をしているかみえない。
しばらく黙りこんでから、「どうせ煮るじゃない・・・」と藤崎が

小さくつぶやいた。
そしてそこに切ったニンジンをもってきた藤田が「あははーみおりん、見た目と違っておっとこの料理～」とごきげんな様子で笑った。
なんとかかんとかできあがったカレーを、硬めにたけた米と一緒に口を入れる。
・・・カレーだ。まごうことなきカレーだ。
まあ、野菜をきってルーを入れるだけなので、間違えようがないだろう。
おもったよりみんなお腹がへっていたらしく、特に会話らしい会話もしないでみんなカレーにがっついている。
「ふうーおれ、おかわり」
「あー誠君、ちゃんとかまなきゃ太るよ」
「明日も泳ぐから大丈夫だ」
「なにその理論ー」
「お前、水泳のカロリー消費量なめんなよ」
きゃっきゃと笑う藤田の声に、顔をあげて、俺もと灰田に皿を渡す。
灰田は心なしか、少し広がったように思える鼻穴をくいと親指でこれみよがしにこすりながら、何も言わずに皿をもっていく。
本庄はもっくもくとゆっくりと皿の上のカレーを消していっている。
「おいしいね」
村上さんが口を開くと、みんながみんな口々にそれに同意をしめす。
「みんなで作ったから、いつものよりおいしく感じるね！」
「カレーはカレーだろ」
「も～！！」
藤田の言葉を戻ってきた灰田がちゃか・・・いや、奴は本音だ。
「ほれ」
灰田が俺の前にカレーの皿をおく。ありがとうと俺が口を開こうとすると、俺の目の前に白い皿がだされる。
「立ってるから、ついでにお願いするわ」

本庄のその言葉に、灰田の腕に筋がたったが、灰田は何もいわずに再びカレー皿を受け取ると再び鍋の方へ歩いていった。
そこにそれまで無言で食べていた藤崎も席をたった。
「・・・おかわり」
突然立ち上がった藤崎の方をみんなが見た為、藤崎は居心地悪そうに眉間にしわを寄せてからぶっきらぼうに呟いた。

じゃんけん男女

周りの視線に複雑な気持ちになったが、お腹が減ってる私は立ち上がるとルーの元へといった。
私はがりがりの肉なし骨子のわりに、結構食べる方なのだ。これ一杯じゃ、夜に絶対お腹がへる。ここは冷蔵庫があり、歩いてすぐにコンビニがある我が家ではないのだ。ここで食べておかないと、私は今夜空腹感で寝れない。
ふらふらと歩いて行くと、そこには本庄の皿にルーをいれる灰田の姿があった。私が横にたつと、そこをお玉でかき混ぜていた灰田がこちらに視線をちらりと向けてきた。そこをかき混ぜて、白米の上にのせる具を均等にしようとしている彼の意外とマメな一面をみて私は思わず口を開いた。
「・・・ルーだけ入れてやればいいじゃない」
小声のそれは灰田の耳だけに入った。
「そんな、子供じみたこと俺はやらねーよ」
「水中メガネかけて、たまねぎしみませーん言ってた人が・・・ねえ」
はんと鼻で笑うと、明らかに灰田の眉間にしわがよった。
「お前、本当に性格わるいな」
「あんたが馬鹿なだけよ」
性格が悪いのはお互い様だ。
と口をぱくぱくさせると、灰田は深いため息をついた。
「そんなにつんつんしてるから、友達できねーんだよ」
言いふくめるみたいな、言い方にカチンときて灰田を睨みつける。
「・・・友達なんていいわ。わずらわしい」
「なに、昔なんかあった系？　みんな色々とあるんですよー」
私が白米を盛り付けた皿に、灰田が軽口をたたきながらルーだけをのせる。

「わかったような口をきかないで」
ルーとたまねぎだけのカレーを見つめたまま、静かにいうと灰田が
「たしかに」と笑った。
私はその声に顔をあげると、灰田はいまいち読めない視線で私を見下ろしていた。そうして二人して黙りこむ。このまま続かと思われた嫌な空気を、突然灰田が切り裂いた。
「お前、貝好きなの？」
本田くんから聞いたのかしら。
私はドロドロに野菜がとけた鍋を見つめながら、「それなにり」と答えになってない答えをかえす。
「そっか」
そっちから聞いたのに、なんなのよその興味のない感じは。
「一応、女なんだな。貝が欲しいとか」
「・・・えっ」
私が欲しいのは、食べれる貝。
私は悩んだ。
くい意地をはったところの、どこか女性らしいの？
灰田はぼうっとこちらを少し見下ろすと、興味を失ったみたいに私の手にお玉を置いて去っていく。
私はそれを「わっかんない」と見送った。

「肝試しのくみわけどうする！？」
夕食を食べ終わった後に、うきうきとした様子で話しだした藤田さん。俺は皿を水につけてから戻ると、藤田さんが灰田を見つめながらそう言っていた。灰田はポッケに手を突っこんだまま、どうでもよさそうに肩をすくめた。
「どうでもいい。じゃんけんとかー？」
ふああとあくびをしながらいうと、藤田さんが不満そうに頬を膨らませ何か言いたげに口をごもごもと動かしたが、結局は灰田の言葉に同意する。俺と村上さんは藤田の言いたかったことがわかってし

まい、思わず目を合わせて「かわいそうに」とアイコンタクトをとってしまった。
「じゃあ、じゃんけんで決めよう！」
藤田さんがそう高らかに宣言すると、自分の両手を掴んでなにやらむにゃむにゃと祈っている。実に女の子らしい、そういう姿に俺は下心無しでかわいいなと思って、ひっそりほほ笑んだ。俺も一応いのっとくか、周りから見えないように机のしたでぐっと両手を祈るみたいにする。心の中で願うくらいはいいだろう。ちらっと藤崎をみると、藤崎は両手を机の上にだしたまま静かに藤田さんの準備運動が終わるのを待っていた。

「最初はぐー！じゃんけんぽん！」
男女それぞれでじゃんけんをする。
なぜ別れたかというと、それは肝試しだからだ。
「きゃー怖い」
「ははは大丈夫だよ」
「きゃー」
「ははは、○○ったら怖がりだな」
「○○君ったら全然怖くないのね！す・て・き！！」
・・・ということを狙っているのだ。
実行委員は、というか全ての年頃の発情した人間たちは。
男三人でいっせいに手を出す。
俺がグーで、灰田がパー、本庄がチョキだった。
「一発できまったな」
灰田の言葉に、俺と本庄が頷く。
「そっちはどうだー？」
女子たちを見ると、誰かと誰かが一緒のを出したらしく二回戦に突入していた。
「あー！決まった！決まったよ！」
・・・四回目でようやく決まったらしく、藤田が鼻息あらく両こぶ

しを天にあげてこっちに瞳をむけてくる。
「そうかー。じゃあ・・・ぐーの人」
灰田の言葉に、藤田さんが「んっ」っといって両手をあげた。
「ぐーの人・・・」
「んーっ！」
灰田の言葉に、藤田が背伸びする。
・・・ガッツポーズじゃなかったんだ。
俺はそう思いながら、そろそろと手をあげた。
胸がいたい。藤田さんの気持ちをわかってるだけに。
それに、個人的にも・・・。
俺が小さく手をあげたのをみて、藤田さんは静かに片手を下ろした。

じゃんけん男女（後書き）

こういう時のじゃんけんで、好きな人と一緒になったためしがありません。

肝試し男女

わざわざ暗がりに、怖がりにいくなんて・・・物好きね。
私は手にもった懐中電灯をぎっちりとにぎって、暗い森を歩く。
田舎ゆえか夜空がきれいで・・・シルエットでざわめく木々の影が見える。
右をみても、左をみても、どこのホラー映画だといわんばかりの光景に、私は思わず喉をならす。
暗闇を怖がるのは人間としての本能なのだ。
そして暗闇の中に、何かが見えるだのなんだのいうのは恐怖心からのあれであって・・・。
ぶつぶつと口を動かしていると、後ろから大きな欠伸が聞こえて思わず両肩をあげ立ち止まってしまう。
「あー、ねみー」
「・・・そう」
「これ、脅かし役とかいないわけ？」
「・・・・・さあ」
退屈そうな声に相槌をうつ。
「これじゃあ、ただの散歩じゃねーか」
はあ～と、いかにもつまらんといった様子の灰田の顔面に私はライトを当てる。
ちょっとした生首の完成だ。
「目にあてんな」
「・・・怖くないの？」
「怖いの？」
私が黙りこむと、灰田は顎に手をあてて「ふ～ん」といいながらこっちをじろじろみてくる。
珍しいものをみるような態度に、苛立ちさらにライトを灰田の目に

近付ける。
「痛い・・つぶれる」
顔をしかめて不細工な顔をした灰田に、私は嫌な笑みを浮かべるとさっさと背を向ける。
今回の肝試しのルートは、ありがちなものだった。
暗い森を懐中電灯一本で歩いて、奥にある神社においてあるスタンプを手に押してくる。
・・・というものだ。
現在、私たちは暗い森を二人で歩いている。
風が、ごおっと音をたててなると木々がざわつく。
私は闇の奥で何かが動いたように感じて、立ち止まるとそちらにライトを向けた。
「なに、でた？」
なにがよ。
心の中で返しながら、ライトを上下左右にゆらす。
「・・・くま、とか、いないわよね」
幽霊とかお化けとか妖怪とか、そういう非現実的なものではなく、野生動物の恐怖に声を震わせる私に、灰田は私の手から懐中電灯を奪う。
「そんな危険な生き物いるところで、夜中に肝試しやるわけねーだろ」
こっちが幽霊になるわ。
と軽口を叩きながら、前を歩きだす灰田の後ろに私はさっとついていく。夜中の森に一人で、ライトもなしで置いていかれるのは誰だってごめんだろう。
「くまじゃなくても・・・イノシシとかいるかもしれないじゃない」
「おーうりぼう、かわいいじゃねーか」
それなら逢いたいわ。という灰田に私が珍しく力説する。
「野生のイノシシなめない方がいいわよ。ニュースでみたけど、奴ら、すごいわよ」

「すごいんだ」
私がうんと頷くと、灰田は空気の動きで私の頷きを察したのか絶妙なタイミングで「そうか」と頷く。
それから黙々と二人で歩いていると、突然右側の方からガサガサと大きな音がした。
「ひっ」と情けない声をあげて身体を固まらす、思わず助けを求めるように手をのばした先には灰田の背中があった。
灰田の黄色いTシャツをぎゅっと握ると、灰田は何も言わずにライトで空を照らす。
ばさばさと忙しない音を立てる方向を、灰田は目をこらして見つめると「鳥だな」と音の正体を私に告げる。
「くそ鳥が、焼き鳥にすっぞ」
おもわずもれてしまった自分の暴言に、しまったと思うが灰田は少し間をおいてから「俺、塩が好き」と
・・・焼き鳥の味のリクエスト？をしてきた。
最初、灰田がなにをいってるのかわからなくて、ぽかんとしてしまったが、意味がわかると私はぎゅっと握ったままのTシャツを離す気にもなれないで「きぐうね。私も塩派だわ・・」とぶっきらぼうに返した。
私がにぎったままのことに、灰田は特になにも言わないで黙々と森を歩き続ける。
そうしてしばらくして、森のひらけた所にでた。
目の前にはライトが二つついた神社が、不気味にたっていた。
暗闇にそびえる不気味なそれに、私がぶるりと背を震わせると、灰田が突然立ち止まる。
「なに」
さっさといきなさいよ。というか突然無言で立ち止まらないでよ。
心の中を様々な言葉がかけめぐったが、私のくちからでたのは「なに」という二言だけだった。
中をみあげている灰田が不気味になって、私はもっているTシャツ

をぐいぐいと引っ張る。
「なに？なになに？」
「・・・・上」
「は？」
「上、見ろ」
灰田の少ない言葉に、私はごきゅりと喉をならす。
怖い話とかでよくあるパターンで、そういって見上げると真上には血だらけのお、お、女が・・・。
馬鹿げたことを考えてるというのは重々承知だが、思考は止まらない。
がくがくと足が震えるのを感じて、思わず灰田の背中に頭突きするような形で顔を伏せてしまった。
もうやだ。なにも見たくない。だから嫌なのよ。何が学校行事よ。ばかじゃないの。ばかじゃないの。
「おい。上、見ろって」
「や」
「きれいだぞ」
はあ？瞑っていた目を思わず開いてしまう。
「夜空」
灰田の言葉に、私はばっと顔をあげると、そこには一面の星空があった。
わたしがぽかんと口をあけて見上げていると、灰田が前にあるスタンプに手をかける。
私は灰田がスタンプを押すのを空気の揺れで感じながら、上を見上げることをやめることができない。
こんな星空、みたことなかった。
田舎だから空気が澄んでるのか、星がまたたく、という言葉の意味を私ははじめてこうして目にすることで理解できた気がした。
「きれ・・・」
いと声をあげようとしたら、突然頬に衝撃が走る。

バンと、何かを叩きつけらたような衝撃に私が目を下界に下ろすと、そこには灰田の姿があった。
目があうと、頬に張り付いていた何かが離れていく。
ぺっとりとした感触に、私が頬に手を伸ばし触れるとぺっとりとした何かが自分の頬についているのがわかった。
「・・・なによ」
これ、手についた黒いものに鼻を近づけると、インク臭かった。
「・・・・・・・・・・・・・・は」
インク臭いそれに、私は頭が真っ白になる。
灰田の方をみると、無表情な灰田の手にはスタンプが握られていた。
「・・・・・・ありえない」
私がそういうと、灰田はにやりと「ぼけづらしってからだ」笑った。

灰田をしばらく罵倒し、灰田の手からスタンプを奪い取って奴の顔面に何度もスタンプを押しつけてようやく気が済んだ私は、怒りに持ちあがっていた方をようやく下ろした。
嵐のような私に、なすがままだった灰田が「・・・いくらなんでもやりすぎだろ」と小声でいったが、私はそれを無視してスタンプをぱんと元のところに戻す。
「女の顔にスタンプつけた報いよ」
「・・・女だっっ！！」
灰田の言葉の途中で、私はだんと右足を灰田の左足の上に押しつけた。
ぎゅっと足に力をいれると、灰田は開きかけた口を閉じる。
彼にしては利口な判断だ。
私はふんと鼻をならし歩き出すと、灰田が後ろからおそるおそるといった様子でついてくる。
「なあ」
「なによ」

「お前、付き合ったことないだろ」
「・・・・・・・」
灰田の言葉に私はざっと立ち止まる。
突然の質問の意図が読めないので、顔を見上げると灰田のスタンプでごちゃごちゃになった顔が目に入る。
もっていたライトで灰田の顔を尋問するかのように照らすと、灰田がまぶしさに目を細める。
「まー、こんだけ凶暴だったら彼氏もできないわな」
顔をしかめたままの灰田に、私はライトを皿に灰田の目に近付ける。
「いたいです。というか熱いです」
敬語になった灰田の顎にガンと音をたててライトをひっつける。
そうして下から何度か小突く。
「・・・あんたに関係ないじゃない」
「・・・そうですね」
灰田が口を開いてる所を、さらに小突いたら舌を噛んだらしく灰田は情けない声をあげる。
本当に、失礼極まりない男だ。
深いため息をもらして灰田に背をむけると、後ろの灰田も大きなため息をついたのが耳にはいった。

初めに歩いた道を、もくもくと歩いていると、行きよりも若干速くスタート地点の明かりが目にはいった。私はほっと息をもらすと、ずっと黙りこんでた灰田が突然話しかけてきた。
「おい」
「・・・」
「おい」
「なによ」
最初は無視したが、二度話かけられて私はようやく返事をすると、灰田がはいとこちらに何かを手渡してきた。
私は冷たくてすべすべしたまあるい感触の掌の中のものに目をむけ

る。
私の掌に乗せられたのは、小さなサクラ貝だった。
「・・・貝がほしくて潜ったんだろ」
確かに、貝はほしかった。
貝は貝でも食べるほうのだけど。
掌の食べられない、きれいな貝を見下ろしながら黙りこむ。
「女って、そういうキラキラしたの好きだよな」
どうせなくすのに。
灰田はそういいながら、さらに白くてすべすべした貝も乗せてくる。
「海になれてないくせにあんま危ないことすんなよ。ほしんだったら、慣れてるやつにいえ」
それか砂浜をあされ。
灰田はそういうと、みんなのもとへと戻っていく。
私は手に乗せられた、比較的どこの砂はまでもみつけることができる貝を見下ろして、ため息をつく。
女の子が全員が全員、こんなのほしがると思ってんのかしら。
でも、それにしてはすぐ捨てるとか・・・。
女性に夢をもってるのか、それとも持ってないのか。
灰田の奇妙な行動に、私は掌に力をいれる。
いれたとたんに、貝同士が重なりあいざりざりと不快な音が耳にはいる。
私は、こんなもの別にほしくないのだ。
そう心で吐き捨てながら、これでスタンプがちゃらになると思ってんじゃないだろうなと不満をもらしながら、仕方なくパーカーのポッケにそれを無造作に入れた。

スタート地点に戻ると、ざわつくクラスメイトの姿が目にはいった。
戻ってきた私たちに、実行委員が気付いて近寄ってくる。
「灰田君！藤崎さん！大丈夫だった！！？」
息を切らせながらこちらの無事を確認してくる実行委員の姿に、頷くと彼女は一瞬ぎょっとした顔で灰田の顔を見つめたがほうっと胸をなでおろした。
「どうしたんだ？」
灰田がそう問うと、実行委員は少し周りを見渡してから小声でこっちに語った。
「あのね。あんま言いたくないんだけど、さっき灰田くんたちより後にいった子たちが・・・・幽霊みたって騒いで戻ってきたのよ」
「「・・・・」」
「何を見たんだ・・・？」
「・・・男の生首」
隣にたっている灰田の肩が大きく揺れたのは、私の勘違いではないと思う。
「しかも顔に御経を描かれていた、なにあれ耳なし法一！？とかいって騒いでてさ～」
気味悪いよね。これじゃあ、ここで肝試し終了だな～。
といって、去っていた実行委員の後ろ姿を見送って、私はがくりと肩を落とした。
隣に立ちつくす灰田に目を向けると、顔にまんべんなく私のてによってスタンプを押された顔がこちらを無表情で見下ろしている。
・・・まさか、ね。
私が渇いた笑いをもらすと、灰田は頭をかかえた。

肝試し男女（後書き）

耳なし法一正体は・・・？

まさか、ね。

続・肝試し男女

木々が夜風にざわつく。葉と葉がこすれる音は、小さな囁きにも似ている。
「これ、やばいよね？」
隣を歩く藤田さんが泣きそうな声をあげ、俺の左腕にすり寄った。たぶん・・・あたってる。
脳内をよぎったささやかなプリンの映像を、俺は頭をゆすることで払拭させる。
「かおるくん、怖いの好き？」
「・・・どちらかというと苦手、かな」
あははと乾いた笑いをもらしながら、ライトで目の前の道を照らしだす。
俺の情けない言葉を責めるように、風が強くふいた。
ひっと声をあげた藤田が更に身体をひっつけてくる。若い女性の身体がこうまで密接にくっつく、という機会は残念ながら今までの自分の人生の中で一度もなかった。
雑誌やＴＶや夢でみた身体は、柔らかいが確かな感触をもってそこに存在している。好きとか嫌いとか、そういうのじゃなくても、女性の身体というものはここまで柔らかくて心地よいものなのか、ということがわかると、傾国の美女や女に狂った男たちの気持ちがわかるきがした。
これは、やばい。
「苦手なんだ・・・そうだよね」
仕方ないと笑いながらも、藤田の言葉の端に見えた残念そうな色が見えて、俺は思わず「ごめん」ともらしていた。俺の謝罪に藤田が「誰だってこわいもん！」と慌ててフォローを入れてくれる。
「あーもう、怖い。怖い」
風が強くなったことで、葉がざわざわとざわつく。森にいたずらな

気持ちで入ってきた不届き者に警告するかのようだ。
「先に、いった人たちの姿が見えないね」
「うん」
俺たちより先にいったのは・・・灰田と藤崎のペアだ。
背中が見えないように配慮した時間配分をしているのはわかる、が、こうまで暗闇の中で何も見えないといろんな意味で不安になってくる。
「お化けに食べられちゃった～とかじゃないよね・・・」
自分が馬鹿げたことをいってる自覚があるらしい藤田は、おかしな笑い声をあげた。
俺もつられて笑う。さすがにそれはないでしょ。と。
もしあるとしたら野生動物じゃないと俺がいうと、藤田の肩がびくりと揺れる。
「・・・くまとか、いないよね」
ぶるりと喉を震わせた藤田に、俺は「・・・たぶん」としか答えることができなかった。
沈黙をやぶって藤田が場に似合わない明るい声をあげる。
「そういえば！　かおる君って好きな子とかいる！？」
・・・本当に話がいきなりがらっと変わったな、俺は苦笑いする。
「そういう藤田さんは？」
「質問に質問でかえしちゃうんだ。けっこうかおるくんって意地が悪いね」
「・・・・」
「・・・お互い当ててみようか」
意地の悪い顔をした藤田が提案した。
「別に、いいよ」
ずっと歩き続けることと、この恐怖心がまぎれるならそういうのも楽しいかもしれない。
俺が頷くと、藤田がにこりと微笑んでせーのっと声をそろえるための合図をとる。

「みおりん」
「灰田」
二人して立ち止まって、顔を見合す。
きょとんとした顔の藤田が、とたんに両頬に手をあててその場にしゃがみこむ。
「・・・そんなに私ってわかりやすい」
しゃがみ込んだ藤田にライトをあてると、赤い耳が目に入った。
俺はそれをみて、冷静な頭で「女の子だな」と思った。
可愛らしくて、明るくて、恥ずかしがりやで、どこかの少女漫画かなにかの主人公みたいだ。
「けっこう、ね」
俺が笑うと、藤田が顔をばっとあげる。
「誠くんもわかってるかな！？」
必死な形相な彼女に、俺はう～んと声をあげる。
灰田、が、どう思ってる、というか何を考えてるかまではわからない。
「たぶん・・・わかってないと思うよ」
正直いって、女子とか、恋愛とか、そういったものに興味がなさそうだから。
という言葉は胸の奥にしまいこんでいうと、藤田がようやく立ち上がる。
「そっか～・・・」
嬉しいのか、それとも残念そうなのか、微妙なニュアンスな顔をする藤田を俺は見下ろす。
先ほどのまでの動きを見てると、知られると恥ずかしい、嫌だといった感じだったが、知られてないならそれはそれでさびしいらしい。
女心って難しいな、と思いながらもその一方で、自分もその気持ちがわかった。
知られたくない、でも知ってほしい。
知りたい。でも知りたくない。

「恋愛って、もっと楽しいものだと思ってた」
俺の言葉に藤田が顔をあげ、俺の言葉を吟味するかのように少し悩んでからほほ笑む。
「・・・知らなかったの？」
大人びた笑みを浮かべる藤田に、俺は笑うことしかできなかった。

「ねー馨君」
「うん」
隣を歩く藤田が口を開いた。
「馨君って、誠君となかいいよね」
「・・・うん」
藤田の言いたいことがわかった。
「あのねー・・・」
もじもじとした様子で言葉を中々言えないでいる藤田の姿に、俺は口元だけに笑みを浮かべた。そして中々いえないでいる藤田の言葉を先回りしていう。
「何ができるかわからないけど、できるだけ協力するよ」
こんなもんでいいだろう。
本当に自分に何ができるかなんてわからないが。
俺の言葉に藤田はぽっと頬を赤らめると、きれいに微笑んだ。
「ありがとう」
恋すると女の子はきれいになる、ということは確からしい。
こちらまでほっこりするような笑みを浮かべた藤田をみていると、こちらまで恥ずかしくなるようなそんなくすぐったい気持ちになる。
「私も、馨君のこと応援するね」
藤田のその言葉に、俺は苦笑いをもらす。
何ができるかわからないけど、それはお互いさまですねという気持ちで。
俺のこの笑顔が何をしめしているか、わかった藤田も困ったように微笑んで「前よりなかよくなったもん」と頬をふくらました。

俺は藤田の申し出に「ありがとう」というと、暗闇の先を見つめた。
「・・・・っっ」
先ほどまでのほんわかとした、どこかの少女漫画か青春ドラマのような空気が一気にかわった。
俺のひきつった喉のなる音で。
これは夢だ。夢だ。どうしていきなり青春ものがホラーにかわる。
そんな物語があってたまるか。
現実だ。これは本やテレビの中のことではない、俺にとっての現実なのである。
でも、こんな現実、ありえるのだろうか。
俺は自分の目にうつるものが信じれずに、目をこすった。
疲れてるに違いない。
こすって前をみる。
それは、まだ、そこにあった。
俺のおかしな様子にきがついた藤田が、ぎゅっとつかむ腕に力をいれた。
「なに、どうしたの？」
不安げな声と、あたってるやわらかな感触がやけにはっきりと頭にはいってきた。
「藤田、前」
「えっ、いや！なに！なんなの！」
「わからない」
あれが何かはわかるが、あれが何なのかは説明できない。
藤田が悲鳴をあげて、その場にズリズリとしゃがみ込む。
ああ、やっぱり、彼女にもあれが見えるんだな。
俺はふっと遠ざかりかけた意識を、自分の足にしがみつく藤田の感触でなんとか押しとどめる。
ここで意識をとばしたら、男がすたる。
自分にもそういうがあったんだ。今ここで喜ぶ所はそこかよ。と自

分で自分にノリつっこみしながら、恐怖でしめあげられたような喉をなんとか開いて、腰を抜かした藤田に声をかける。

「行こう」

立てないでいる藤田が、涙目であうあういいながら確かに頷いた。

俺は藤田の腕をつかみ立たせると、ふらふらの藤田の背を支えながら、それに背を向けてスタート地点へと戻り始めた。

ごくりと喉をならしながら、こっそり後ろを振り返るともうそこにそれはなかった。

続・肝試し男女（後書き）

本当に怖い時って、声だせませんよね。

寝起き男子

口から自然ともれだすこの深いため息は、やっとここから解放されるからだろうか、それともこれから再び始まる日常に対してだろうか。
最終日の朝がきた。
蝉の声が目覚まし代わりなことにも慣れ始めたころ、俺たちはここを去る。
命短し鳴けよ蝉
こんなに鳴いてもつがいを見つけることが出来ない蝉に、自分を重ね合わせほんの少し切なくなりながらおれは右に顔を向けた。
……灰田は寝像が悪い。
朝一番に見るのがこいつの顔なんて、なんてしょっぱいんだろう。
灰田の足が俺の太ももの上にどんとのっている。俺は無言で灰田を見つめる。
灰田は目を閉じたまま、口をぽかんとあけたまま穏やかな寝息をたてていた。
（まつ毛、長いな・・）
自分の思考に嫌気がさしながら、俺は思わず自分の頬を叩いた。
気持ち悪い。
ほっぺたに手をあてたまま、灰田の顔をみつめているとギシリと古い畳が軋む音が耳に入った。俺は油のさしわすれた機械みたいに、ぎぎぎと音をたてながら音の方に顔を向けた。そこには朝一の走りから戻ってきた本庄がたっていた。
「・・・・・なんか、ごめん」
本庄の頬を汗がつたいながれる、絶妙な間をもって息を吐きだすと、本庄は真顔でそう謝ってくるりと背を向ける。

「まて、違うんだ」
俺ががばっと上体をあげて本庄に手を伸ばそうとすると、俺の激しい動作に隣ですやすやと寝ていた灰田が瞳をパチリと開いた。
「ふあ～～」
のんきに大きな欠伸をする灰田を横目に、俺は本庄の足を掴む。
「違う、違うから。寝ぼけてたの、寝起き」
本庄の足を掴んで必死にいっている俺を、灰田がぼうっとした目で見つめてる。
「なに、どうしたの？」
「いやー・・なんていうか」
「だから違うって、お前しつこいぞ！」
何もわかっていない灰田に、何かを喋ろうとした本庄を俺の怒りに満ちた声がさえぎる。
「・・・なんかよくわからないけど、最終日なんだし仲良くいきましょうよー」
灰田はぐっと背伸びをしながらそういうと、さっさと洗面所へ向かってしまう。俺は額に手をあてながら、その場であぐらをかいて海より深いため息をついた。目の前でたつ本庄は「なんかごめん」と再び言って決まりが悪そうに頭をかいた。
「いいよ、もうホモでもなんでも、違うし、本当に違うし」
「うん、うん、そうだよな。人間愛なんだよね」
俺は否定しないよ。と実に優しい言葉をかけながら、本庄はシャワーを浴びてくるといってさっていった。
俺は一人になった部屋でどっと疲れると、再び布団の上に大の字になって倒れ込んだ。
「・・・つかめねぇ・」
冗談なのか、本当なのか。
仲良くなれたのか、はたしてもっとわからなくなったのか。
俺は複雑な気持ちを抱えながら、渇いた笑いをもらすことしかできなかった。

まあ、五日だし。
もう、五日だし。

まあ、いっか。
俺はよっと立ち上がると洗面所へと向かう。
頭から水道水をかぶってびしょびしょになったまま動けないでいる灰田にそっとタオルを渡すと、俯いたままで「ありがとう」とほんの少し恥ずかしそうに灰田がいったのをみて、俺は腹から大笑いしたいような気持ちになった。
「今日でやっとお前の寝ぞうの悪さから介抱されるかと思うと・・・俺は今日という日の朝を忘れないだろう」
こうしてお前にタオルを渡す役目からも解放される。自分がやらなければいいだけの話だが、顔を洗って帰ってきた灰田のTシャツがびしょびしょになってるのを見てしまうと、ほっておくこともできなかった。
ほっておけないというか、無意識構ってちゃんというか、ふらふら歩いていくのをみてこちらが見てられないというか・・・。
お兄ちゃんである俺は、がくっと自分の気質に頭をかかえる。
隣でいまだに眠そうな顔で、窓から見える凶悪な朝の太陽をみつめている寝癖で鳥の巣状態の灰田を見た。
「・・・灰田、お前上に兄弟いるっけ？」
「・・・・・いないよ」
灰田はぼうっとした声で答えると、タオルを肩にかけたままさっさと歩いて行ってしまう。一人残された俺は去っていく鳥の巣を見送ると、蛇口をひねって上にむけると勢いよく湧きあがるそこに頭を突っ込んだ。
冷たい流水に顔を押し付けると、脳味噌の奥までダイレクトに伝わる冷たさにほんの少しのこっていたけだるさと睡魔が一気にふっとんだ。

寝起き男子（後書き）

りんかいがっこうなげえ。
と書いている本人が思ってしまいました。
次からは夏休みです。
学校以外であの子とあっちゃうかもよーふーな夏休みです。

ただいま男子

臨海学校から帰って来て、俺は玄関にどがっと荷物と腰を下ろした。
妹は帰ってきた俺にたいして「おかえり」の一言も言わずに、靴を脱ごうと座り込んだ俺の隣に置いてあったお土産袋を掴んで「おかあさ～ん」と大きな声と足音をたてて去っていく。俺は両ひざに手を置いたまま深いため息をつくと、だらしなく足をふってスニーカーを脱ぐ。ぶんぶんと足をふって、踵を踏みつぶしながら靴を脱いでいると、後ろからトントンと足音がして後ろに誰かが近寄ってきたことがわかった。
「こら！ちゃんと脱ぎなさい」
後ろから飛んできた声に、俺は黙ってきつく結びすぎてしまった靴紐に手をのばす。夕食の準備をしていたのか、濡れている手を赤いチェックのエプロンの前で拭きながら俺の背後に母親がたつ。
「おかえり。楽しかった？」
「・・・それなりに」
「それなりに楽しかったのね、それはよかった」
母親はうんと頷くと、俺の鞄を掴んで部屋の中へともって行ってしまう。俺はあっと思いながらも、去っていく母親の背中を見送る。誰の姿も見えない、開かれたままの今の扉の向こうから澪の「なにこれー」という不満たっぷりの声が聞こえる。俺はようやく靴を脱ぎ終えると、膝に手をあてたまま立ち上がり居間へと向かう。居間へと現れたお兄様に向かって澪の不満たっぷりの声が聞こえてくる。
「ねー、もっとさ～他のなかったわけ？」
不満をつむぐ子憎たらしい唇には、すでにあけられた俺のお土産のクッキーが挟まっている。澪はぼりぼりとクッキーを平らげながら、他のお土産にも手を伸ばす。土産なんて無難なクッキーやらなんや

らのこまごまのお菓子に決まってるだろう、と思いながらも俺は澪の脇をとおってソファーにどがっと腰を下ろす。
「・・・なにこれ？」
澪のいぶかしむ声に、俺は目の上に置いていた手の下からそちらに視線をむける。
「・・ああ、貝だよ」
澪の手には何重にも白いビニールで包まれた手の日からほんの少し余りぎみな袋が握られていた。
「なに？食べれるの？」
俺の許可もとらずに勝手に澪は袋を開けようとしはじめる。硬く結びすぎてしまった袋は中々開かずに澪が「ふんぎー」と実に可愛らしくない声をあげなら顔を真っ赤にしている。俺はそれをソファーのひじ掛けに頭を乗せながらぼうっと見ていた。
「かたく結びすぎーちゃんと考えて結びなさいよね」
澪の憤怒する声に、俺はとじていた口をひらく「いっとくけど、それかいがらだからな」中身はない。そう言うと、澪の手から力がするりと抜けた。
「なんだーただの貝柄かよ」
澪がばきっと唇に力を入れたのか、クッキーが半分床に落ちる。澪は「あーあ」と言いながらそれをひろいあげると口にいれてしまう。そうして手早く咀嚼すると、こちらに目をむけてくる。
「かいがらとか拾ってきちゃってどうしたの？似合わないよね」
ぐさりと刺さるような言葉に、俺は眉をしかめる。
灰田が真面目くさった顔で、「女なんて貝がら渡せばみんな喜ぶもんなんだよ」と言ってたので、本当かと思いつつ拾ってきた貝をわざわざこうして持ってきたわけだが・・・。
一応女であるはずの澪の反応は悪い。
それとも妹である澪を女に分類する俺が間違っているのだろうか。
俺は藤崎が灰田から貝柄をもらったことを聞いた藤田がだだっこのように灰田の周りをうろついて「貝私にもとってーとってー」言っ

てたのを思い出す。そして、めんどくさそうに俺たちにも貝柄探すの手伝えと言ってきた灰田を。結局最終的にはうささんグループ全体で、砂浜にしゃがみ込んで砂を掘り続けることになってしまった。となりでもくもくと泡立った白波がまだ残る砂を掻きわける藤崎を横目で見つめていると、滑れ落ちてきた髪をかきあげる藤崎と目があってしまう。

「…なかなか、みつからないね」

「そうね。・・・・あっ」

突然あがった声に導かれて藤崎の手元を見つめると、そこには半透明の青色をした石があった。

藤崎はそれを指先でつまむと太陽にかかげる。

キラキラと光りを通して青く光るそれに、藤崎はほうっと息をつく。

「きれいな石」

「藤崎、それガラスだと思うよ」

俺の言葉に藤崎の瞳が石から俺にうつる。

まんまるに開かれた瞳に、俺は少し吹きだすとごめんと藤崎に謝りながら言葉を続ける。

「水に流されて、砂と一緒にあらわれている内に角がとれちゃってそんな風にすべすべなきれいな石になるんだよ」

俺の言葉に藤崎はへーと頷くと、いそいそとビニール袋を開いて中にそれをしまいこんだ。

「持って帰るの？」

俺の言葉に藤崎はうんと頷いて、さらにそれを探し続けた。

貝よりガラスのかけらを夢中に探し始めた藤崎に、おれはなぜかほっとしながら隣で同じく透明でいびつなガラスなかけらを探し始める。

キラキラと輝く白波をたどると、藤田にせっつかれながら砂浜を両手で掘り返している灰田の姿が目に入る。

藤田がぎゃーぎゃー騒ぎ出してから少しして、一人でいた俺の所にやってきた灰田は静かに「違うからな。ごめん」といった。

違うから、ごめん。
って、なんだよ。俺は喉の奥まででそうになった声をぐっと喉仏で押えこみながら、灰田の顔を見れずにただ「どうせいつもの何も考えていないでした行動だろ」と軽口をたたくと、隣の灰田がほっと安堵したように息をつくのがわかった。
「海にくると貝がらをひろってていう奴がいてさー。そんで癖で拾っちゃったんだけど、俺は別にいらないからよう」
手に入れたけどいらなんだ。灰田の傲慢な言葉に俺はわけもわからない衝動をかんじた、胸のうちで膨れるような炙れるような熱くて暗くて息苦しくなるような感情を。
「そうなんだ」
「ほら」と言って灰田がこちらに手を差し出してくる。だまったまま俺が右手を上にむけて拡げると、そこにかいがらが落とされる。
「お前にもやるよ」
「・・・きもちわるい」
俺の言葉に灰田は笑うと「本田にもやってくるわ。まだまだいっぱいあんだよ」といってその場を立ちさる。俺はそれをじっと木偶の坊のようにそこに立ちながら見送ることしかできなかった。
ぼうっとした頭のままで、真剣にガラスを探している藤崎の横顔が浮かぶ。俺がそっと藤崎の小さな掌の上に緑と青の石を落とすと、藤崎はほんのりと頬を紅潮させながら「ありがとう」と波の音にまぎれて消えてしまいそうなほどの声でお礼をいった。
俺は藤崎のそれを思い出して、彼女は灰田の前でもあんなか顔をしたのだろうかと想像すると喉の奥に苦いものを感じで再び目をふせる。
隣で騒ぎながら土産をあさる澪に、母親が「お兄ちゃん疲れてるんだから、もうちょっと静かにしなさい」と叱りつける。澪が黙りこんだので、テレビのついていない居間には遠くから聞こえてくる蝉の声が微かに聞こえる。俺は瞳を閉じながら、自分の腹の上にかけられたタオルの柔らかな感触を感じながら深く息をすってその場で

眠りにおちた。

バイトしませんか男子

「馨くぅ～ん」
　人のベットの上にでかい図体を乗せながら、家主よりもくつろいだ体勢をとる灰田が甘えたような声で俺の名を呼ぶ。
俺は手に持った麦茶をぐっと飲み干すと、テーブルに叩きつけるいきおいで空になったコップをおく。突然の大きな音に灰田が上体をおこして「あーびっくりした」というのを聞きながら、俺はテレビを見るわけでもないのにチャンネルをかえる。
夏休みがはじまって二日目、暇だーといった灰田が突然うちに飛び込んできた。
澪が「お兄ちゃ～ん、友達きたよ」と言いながら、勝手に部屋に通したのだ。澪はこちらが何もいってないのに、さっさと氷のはいった麦茶を二つとちょっとした茶菓子を部屋までもってきた。
灰田は見ていた雑誌から顔をあげると、澪に「ありがとう」といいながら微笑みかけた。
俺は面白くないものをみてしまったとおもいながら、でれっとしてしまった澪をドアから無理やりおしだす。ドアの向こうからなにやら声がして、灰田が帰ったあとがちょっと怖かったがとりあえず今はいい。考えない。
俺は澪の手からうばったお盆をもったまま後ろをみると、灰田はこちらに興味をうしなったみたいで再び視線を雑誌に落としている。
「灰田ー。お前あんまりうちの妹にいい顔すんなよ・・」
俺の言葉に灰田はおもしろいものをみるような目で、こちらを見上げてくる。
「お兄ちゃんは妹が大好きなんですな～」
心配すんなよ、おれ年上の御色気ムンムンなお姉さまが好きだから。
初潮もきてねーようなガキには反応しねーわ。
下品なことをいう灰田を、澪にみせつけてやりたいと思いながら俺

はおぼんを机の上におく。
灰田はさっと手をのばすと麦茶を掴んで、一気にあおる。
あおった時に見えた喉仏が、大きく上下するのをみて、こういう男らしいところに女子は惹かれるのかとぼうっと見つめる。
灰田は空になった麦茶をおくと、いきなり人の布団にダイブしたのだ。
そうしてお互いが、お互いに好きなことをやりはじめてから少しして、灰田が甘えた声でこちらの名を呼んだのだ。
「気持ち悪い」
「ひっど～い」
やけにまのびした声で俺を非難しながら、灰田はベットの上を転がる。
人のベットの上で暴れるなと思いながらも、俺はベットに頭を預けたままニュース番組をみる。
すると、灰田の足が俺の視界にはいってくる。
あきらかに邪魔してきれいる灰田を最初は無視していた俺だが、さすがに頭のうえに足を乗せられた瞬間に無視し続けることを諦めて俺は灰田に話しかけざるえなくなった。
「・・・さっきからなんだよ」
足を振り払いならいうと、ベットの上をズリズリと移動して灰田が俺の顔の横に顔をひょっこと出してきた。至近距離で灰田と見っていると、灰田がひそびそ話をするようにこちらに顔を傾けてくる。
「あちーよ」と思いながらも、灰田の提案に俺は耳を傾ける。
「バイトしね？」
灰田のいたってシンプルな言葉に、俺はぼうっとしたまま灰田を見つめ続ける。
「コンビニで、バイト」
「・・・コンビニで？バイト？」
「コンビニじゃなくても、なんか他でもいいから。とりあえずバイト、しね？」

灰田の言葉におれはぼうっとしたまま、あけっぱなしの窓から広がる青空をみつめる。
夏だ。
まごうことなき夏だ。
さんさんと太陽がふりそそぐなか、部屋の中にいていいのか若者よ！！！
ぼうっとしたままの俺の後ろから、灰田がそう熱弁した。
「おまえ！あれだぞひと夏の経験とかそういうのもあっかもだぜ！！うひょ」
灰田は気味が悪い笑みを浮かべながら俺の頭をぐりぐりとなでてくる。
俺はこいつまじうぜえと思いながらも、バイト、いいかもしんないと頭をがくがくさせられながら頷いていた。

偶然運命男女

ぴんぽんぱーん
ぴんぽんぱーん

気の抜けた音が客の来店をつげる。
「いらっしゃーませー」
「しゃーまさせー」
顔もあげずに適当な挨拶をしながら、俺たちは黙々と棚に商品をチェックしつづける。
俺たちが選んだバイトは近くの個人商店での接客業だった。間違えるたびにじじいに怒られ、そのたびに肩をよせながら買ったパピコを吸いながら肩を落として帰る日々を数日こえて、なんとか形に・・・なって・・・・・・・・きた・・・・といいなと思う。
顔の見えない客が店内を歩き回る音が聞こえる。ぺたんぺたんというサンダルで歩く軽い足音にこれは子供か女だなーと思う。
不自然な体勢をしていたせいで居たくなった腰を叩いていると、お客様がこっちまでやってきた。
俺はすっと腰をのばすと、道を通れるようにさっとわきによる。
「・・・本田君？」
ペタンと足音がとまった。
俺はんっと顔をあげると、そこには藤崎の姿があった。
「・・・あっ・・・」
「・・・おっ・・・」
俺と灰田は突然の知り合いの来店に声をもらす。
藤崎は俺と灰田を両方みてから、ふと息をついた。
「ここで、バイトしてるんだ」
「うん、そうだよ」

「へー」
会話が止まった。
藤崎は普段より目を大きくしながら、エプロンをつけて作業をする俺たちをマジマジと見つめてくる。
やめろよ、照れるじゃないか・・・と照れながら俺は藤崎に声をかける。
「藤崎、よくここくるの？」
藤崎はこくんと頷いた。すると普段と違い少しはねている髪がぴょこんと揺れた。
「うちから近いから」
「へー、うちが近いんだ～」
いいこと聞いたな、と俺はルンルン気分で藤崎の言葉に相槌をうつ。
そんな俺たちを無視して棚の整理を続ける灰田。
「じゃあ、よくくるんだ」
「うん」
「それじゃあこれから・・・よろしくな。まだ慣れてないから間違えるかもしれないけど」
ちょっと照れながらいうと、藤崎は小さくこくんと頷いてくれた。

「ありがとうございましたー」
「がっとうございしたー」
アイスを買ってさっていた藤崎の後ろ姿を見送ると、隣にたっていた灰田がどがっと肩を叩いてくる。
「いっだ」
「いいかんじじゃーん」
「あ？」
「いいかんじじゃーん」
両手でこっちを指さしながらいってくるうざい灰田に、俺は「あん？」と再び睨みつけると、灰田が「・・・じゃん」と小さくいいながら両手をおろした。

「ただの世間話じゃないか」
「俺なんて一言も話さなかったぜ」
お前は何を胸をはって言ってんだ。俺はにこっとほほ笑む灰田に深いため息をつきながら目をそらす。
「灰田ってさ、ここだと家から遠かったんじゃないのか？」
ちぇーつれないなとぶつくさ言っていた灰田に声をかけると、灰田はキラキラした目でこちらをみてきた。
「えっ、あーうん。遠いけど、でも別に。ダイエット」
女みてーなこと言いやがって、俺は虫唾がはしると小声で吐きながら灰田から再び目をそらす。
夏休みがはじまってから灰田は、このバイトや突然家にきたりと何かと俺の前にあらわれる。これじゃあ学校にいるときと変わらないじゃないか、と思いながらも別に迷惑というわけでもないので特になにもいわないが、灰田をちらちとみやるとぼうっとした様子で宙を見ていた。
客がいないし、終日二人でしゃべってろというのも無理な話である。俺たちはお互いにぼうっとしながら、時間がたつのをじっとまつ。灰田がわきゃわきゃしながら行っていた「ひと夏の経験」だが、このバイト先には男しかいないから出会いはない。お客さん、と思うが、中々そうもいかない。客との会話といったら義務的なものばかりで、そこから何かが発展するということは難しい。しかも俺たちは短期のアルバイトであって、長期的なものではなくここにくる客と顔見知りになることも難しいのだ。
本当にひと夏の体験がしたいなら、もっと他の、女の子がいるバイト先を選んだらよかったのに・・隣で宙をみつめたままの灰田をみながら俺はそう思ったが、ここにしたからこそさっき藤崎に会えたとうことに気がついて、虚ろな目の灰田に心の中で「お前の野生のカンって素晴らしいな」といって目を閉じたのだった。

混乱男女

「まっことく～ん」
高い女の声に俺は俯きがちだった顔をあげた。
「げっ」
灰田は実に失礼な声をあげながら彼女に背を向ける。
「まことく～ん！」
薄情な男にそれでも笑顔を失わずに再び声をかける。
「・・・いらっしゃいませー」
無視を決め込むかと思っていた灰田だったが、客は客なのでちくしょうといった苦々しい顔で挨拶をする。
「いらっしゃいましたー」
にこにこと頬笑みながらいう藤田に俺は小さな拍手をおくった。
藤田はそそそっとレジに近寄ると、そのままレジ台に肘をおく。
下から覗き込むように灰田を見つめる藤田に、俺はそろーっと奥へ引っ込もうとするが灰田の手に阻まれた。
「お客様、お邪魔です」
灰田のみょうちきりんな言葉に、藤田はぶっと吹きだしながら「おもしろーい」と声をあげる。
「エプロンかっこいいね」
「ほう、このオレンジのくたびれたエプロンがかっこいいとおっしゃるということは、お客様の美的センスが皆無なようですね～」
必要もない整理をしだした灰田に、藤田はぷくっと頬をふくらませる。
「いじわる～」
「・・・」
無言で背を向ける灰田にぶうたれながらも熱い視線をおくっている藤田に、俺は笑いながらやっと声をかける。
「いらっしゃいませー」

「かおるく～ん、今のみてた？　こっちはお客さんなのひどくない！？　お客様は神様でしょう」
「あれはないなー」
藤田の言葉に頷きながら灰田の背をみやると、肩が微かにゆれたのがわかった。灰田はひとつ深いため息をついてからこちらにやっと向き直る。苦々しい顔で両手を組みながら、藤田に問う。
「・・・誰からきいた？」
「・・・えへっ」
藤田は言葉ではなく指先ひとつで灰田にそれを教える。
当然ながら灰田にはひとことともつげてなかった俺は、灰田のこちらを射殺さんとばかりの瞳に背筋を震わせる。
「・・えへっ」
藤田をまねていってみたが、灰田の顔はいっこうにやわらかさを取り戻さない。
「・・・まさか、こんなに近くに裏切りものがいたとはな」
「裏切りって、、、、」
怖い顔でにじりよってくる灰田に、俺がズリズリと後ろにさがるとそこに藤田がわりこんできた。
「馨くんをせめないで！！」
いつの間にレジにはいったんだ、部外者いれたってしれたらじいさんに怒られる。
・・・色々なことが頭をよぎったが、とりあえず藤田の背中に隠しきれない身体を気持ちだけ隠したつもりにする。それだけで目の前の悪鬼の放つ力が薄れた気がする。
「なんで教えたんだ？　てかいつの間に仲良くなりやがった？メアド交換したんだ？　あっ？」
「この前の肝試しの後でメアド交換したの！　なんで教えてくれたかっていうとー・・・」
もじもじとしだした藤田を手でどけながら、灰田は俺の肩に手をまわす。

「おまえ、俺の安息の地をよくも脅かしてくれたな」
「安息って・・・別にそれほど居心地いいところでもないじゃん」
「こいつがいなければどこでも安息だ」
そういいきる灰田にうしろに立つ藤田が「ひどいよお～」と声をあげる。
遠慮のない灰田と、泣きそうな藤田に俺はおろおろとしながら二人の間にたつ。
さっきとは逆だな、という冷静な自分をぶんなぐりながら、灰田に指をさす。
「・・・・いじめっこっ！」
ようやく出た言葉がこれだった。
小学生みたいな言葉に、がくりと目の前の灰田の肩がおちる。俺はうなじが熱くなるを感じながら、何度も指をぶんぶんとふりまわしながら「いじめっこ！いじめっこ！」と言葉を続ける。
とりあえずこの変な、微妙な、空気をなんとかしなければ・・・俺はピエロになる気まんまんで灰田に何度も指をさしながら、幼稚園児みたいな言葉をつづける。
「・・・・・・なに、してるの？」
そんな状態の俺たちの間に第三者の声がわってはいる。
奇妙な時間をとぎれされた声は、聞いたことがあった。
俺は指をぶんぶんしながら、お会計の方に視線をむける。
そこにはいぶかしむように眼鏡の奥を細めた藤崎の姿があった。

約束男女

バイトが終わった後に謝る灰田に藤田がした命令は帰りにおくっていけというものだった。
灰田はあきらかに「めんどくさい」という眼をしたが、しぶしぶそれに従っている。
「おまえもいくよなー」
「なんで・・・」
灰田の言葉に俺と同じくなんでと言いたげな顔をする藤田を無視して灰田を言葉を続ける。
「別に帰り道だからいいじゃん。なー藤田」
「・・・・いいよ」
数秒の間をもってから藤田はため息まじりに灰田の提案を承諾する。
ジュースを買いにきていた藤崎はそんな俺たちに何もいわずに、台の上にサイダーの瓶をおいた。
レジに近かった灰田をそれを手にとると、ふーんと顎に手をあてる。
俺は灰田がもってしげしげと見つめているサイダーの瓶を奪い取って袋に入れようとしたら、藤崎が「袋いらない」と言ってきたので、シールを貼ってそのまま瓶を手渡しする。
「めずらしいね。瓶のサイダー買うなんて」
俺の手から冷たい瓶を受け取ろうと、藤崎の右手があがる。折れそうなほどに華奢な腕が店の店頭の明るさの下で彼女の腕の血管を浮き上がらせる。その青い線を目でたどるように見つめながら、俺の指先は藤崎の掌にあたる。力ない、自力で動くのも難しいといった人形のように見えたのに、ほんのわずかに触れた藤崎の掌はかすかに湿っていて、濃い青草のにおいがした気がした。
「瓶の飲み物を買うと、夏って気がするじゃない」
ポッケの中から小銭を出すために、少し伏せ目がちになったまつ毛

が藤崎が言葉を紡ぐたびにあわく揺れる。
「それは同意するわー」
珍しく灰田も口をひらいた。藤崎の眼の端がぴくりとけいれんするように揺れる。
「・・・・・へー」
藤崎が五百円玉をこちらに差し出してくる。今ではめっきり目にすることがなくなった、銀色の光をはなつそれが灰田の掌に落とされる。
「あなたにも、そうやって季節感を楽しもうっていう気持ちがあったんだ」
・・・あきらかに馬鹿にした感じの藤崎の言葉に、俺はひっと声をあげる。
わかっていたが、この二人は破滅的に合わない。
というか、灰田と藤田をみていると、こいつは女の好かれようと、いいかっこしようとしてないように思える。
藤崎の意地悪げな顔に、我ながら変態だなと思いながらもドキドキしながら見つめていると、灰田は「やっぱりかわいくねえ」と地の底から這い上がるような声をあげながら、乱暴にレジをしめ、雑に藤崎の手にお釣りを落とした。
険悪なムードの中を、藤崎の隣にずっとたっている藤田が一人明るい声をあげる。
「いいねー」
突然の賛同に、何に？何が？という気持ちになって、藤田を見つめると目があったとたんに藤田がこちらに慣れたウィンクをしてきた。
「帰りにみんなでこれ飲んで夏気分を味わいましょーう」
げっという顔をした灰田と、藤田に腕をつかまれて「なんで私が」と藤崎が叫ぶ。
「いいじゃん。女の子の一人あるきはあぶなよ」
「大丈夫だから」
「いや大丈夫じゃないよ。だって藤崎さん黙っていれば美少女なん

だから。ねっ！かおるくん」
なぜ俺に同意を、てかその同意は前の文のどれにかかってるんだろう・・・俺は喉をごくりと鳴らしながらも、藤田の言葉にとりあえず頷いておく。
すると藤田に腕をとられたままの藤崎がじとってした目でこちらを見つめてきた。
「いや、藤崎はかわいいよ！」
手を顔の前でぶんぶん振りながら慌てていうと、灰田と藤崎と藤田がびっくりしたといった表情でこちらをみてくる。灰田と藤田はニヤニヤといった顔で、藤崎は大きく瞳を開いた後に気まずそうに視線をずらす。俺は穴があったら入りたいきもちで、眼をそらしたままほんの少し赤くなった藤崎の耳を見ながら、藤崎よりさらに顔を赤くしている自分にも気がつかずに亀のように首をシャツに引っ込めた。

かえりみち男女

「みおりんはおうちどこー？」
「・・・近く」
みおりん、を訂正することをすっかりあきらめてしまった様子の藤崎は、藤田の陽気な声に一言返した。
藤田は右と左にぷっつり別れた道の真ん中で、藤崎に「右ｏｒ左」と歌うように問いかける。
藤崎はこれまた少し間をおいてから、すごく疲れた様子で左を指さした。
藤田は「わーお」と外国人もびっくりな声をあげて、「私右なのよね」とこれまた高らかに歌いあげた。
「そうかじゃあここでバイバイだな気をつけて帰れよ」
灰田は息も飲む暇のないほど早口にいうと、俺の肩をがっと掴み二人に背を向ける。
「まった――――！！」
逃亡を企てた灰田のバックを藤田がぐっと握り締める。灰田はぐっと苦しげな声をあげながら、犬みたいにそこにつなぎとめられる。
「はくじょーもの」
藤崎のジト目に、灰田は「お前知らなかったのか」と鼻で笑う。
お前よびが嫌いではない藤崎はちょっと照れながらも、灰田のバックを自分の腕にグルグル巻きだす。
そして自分の満足がいくほど巻き上げてから、こちらに向かって軽く右手をあげて「じゃあまた明日ね」といってリードを掴んだままさっていく。
灰田がぎゃんぎゃん鳴いたが、どこふく風といった様子な藤田はルンルンとスキップを踏みながら薄闇に消えていく。
俺と藤崎は藤田の鮮やかな手並みを唖然と見送ってから、眼を合わ

す。
「・・・いったわね」
藤崎の疲れた声に俺は「ああ」と返す。
藤崎は深いため息をつくと、俺に背をむける。
「じゃあ帰るわ」
「あっっと」
歩き出そうと右足を出した藤崎に俺は何も考えずに声をかける。立ち止まった藤崎がこちらを振り向く。まだなにか用でもといいたげな藤崎に、俺はごくりと喉をならしながら落ち着け落ち着けと呪文のようなひとり言を繰り返しながら、自然に自然とカチカチな唇をひらく。
「おくってくよ・・・」
「近いからいいわ」
「・・・・」
「・・・・・」
そっこう断られた。
がっくりと両肩をおろし、悲嘆にくれる俺はよほどひどい顔をしていたらしく、目の前の藤崎が困惑した表情でこちらを見上げてくる。
「・・・だって、迷惑じゃないの？」
バイト帰りでつかれてるだろうし、小さくこちらを気にする様子をみせる藤崎に俺はブンブンと首を横に振る。そしてその時に目にはいった壁に張られたチラシを指さす。
「だって、危ないから」
俺の指示した先には「痴漢に注意」という古ぼけたポスターが一枚。
俺の言葉に藤崎はふっと困ったように肩をすくめると「じゃあ、お願いします・・・」と、男って大変ねともらしながら俺が歩き出すのをその場に止まって待ってくれる。
一緒に帰る了承を得た俺は、手を差し出すわけでもなくただ街灯の下にたっている藤崎にフラフラと近づいていくと、そのまま隣に立つ。

俺が隣にたつのをじっとしたまま待っていた藤崎は、俺をちらりと見上げて確認してからそっと細い足を前へ前へと繰り出し始める。歩幅の小さな藤崎に合わせ、つまづきそうになる自分の足元を叱咤しながら俺は藤崎の横を歩く。

藤崎が短い、近いと何度もいった通り藤崎の家は確かに近かったが、でもそれでも俺は十分幸せだった。

だって君が隣にいるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0197p/

右斜め、一席後ろ

2011年6月28日13時24分発行